

平成21年度
第1回高等学校入学者選抜審議会
平成21年7月14日(火) 14:00~16:00
県庁9階 第1会議室

資料④

今後の県立高等学校入学者選抜の在り方に関する意見聴取会について

目 次

1	意見聴取会の実施概要 P	1
2	意見聴取会の意見整理 P	2
3	意見聴取会での傍聴者からの主な意見要旨のまとめ P	6
4	意見聴取会での意見発表等概要		
	(1) 仙台会場 P	8
	(2) 石巻会場 P	16
	(3) 南三陸会場 P	24
	(4) 大崎会場 P	32
	(5) 大河原会場 P	40

今後の県立高等学校入学者選抜の在り方に関する意見聴取会について

1 意見聴取会の実施概要

① 目的

高等学校及び中学校における教育の目的の実現及び健全な教育の推進を期し、より公正かつ適正な選抜を実現するため、「今後の県立高等学校入学者選抜の在り方について（中間まとめ）」に対する意見を広く県民から聴き、入学者選抜審議会における最終答申を検討する際の参考にする。

② 地区毎の開催結果

地区	開催日時	会場	意見発表者	出席者数 (傍聴者を含む)
仙台	平成21年 3月15日 13:30~15:30	県庁舎 講堂	○多賀城高等学校長 武田 和夫 氏 ○仙台市立岩切中学校長 菊池 義廣 氏 ○塩竈市立第一中学校PTA事務次長 三浦 利政 氏 ○仙台市学校支援地域本部スーパーバイザー 山川 由紀子 氏 ○仙台商工会議所 議員 山口 哲男 氏	約 60 人
石巻	平成21年 4月19日 13:30~15:30	石巻合同 庁舎 5階大会 議室	○石巻工業高等学校長 渡邊 幸雄 氏 ○石巻市立住吉中学校 教諭 黒沼 俊郎 氏 ○登米市立佐沼中学校 PTA会長 加藤 義憲 氏 ○石巻市PTA協議会 事務次長 田村百合子 氏 ○大幸工業株式会社 代表取締役 廣中 孝彦 氏	約 45 人
南三陸	平成21年 4月26日 13:30~15:30	南三陸合 同庁舎 3階大会 議室	○本吉響高等学校長 高橋 郁夫 氏 ○南三陸町立志津川中学校 教諭 小野寺幸博 氏 ○気仙沼市立面瀬中学校PTA会長 小野寺清江 氏 ○本吉町スポーツ少年団指導者協議会長 菅原 英俊 氏 ○NPO法人 大島大好き 代表 白幡 昇一 氏	約 40 人
大崎	平成21年 5月10日 13:30~15:30	大崎合同 庁舎 1階大会 議室	○栗原市立金成中学校長 高橋 憲夫 氏 ○宮城県古川高等学校 教諭 加賀谷 亮 氏 ○大崎市PTA連絡協議会長 峯岸 賢一 氏 ○地域若者サポートステーション みやぎ北若者サポート ステーション所長 馬場 義竜 氏 ○農業経営者 石川 和彦 氏	約 60 人
大河原	平成21年 5月17日 13:30~15:30	大河原合 同庁舎 別館2階 第二会議 室	○柴田町立船岡中学校長 伊藤 誠 氏 ○宮城県角田高等学校 教諭 大坪 泰久 氏 ○大河原町立大河原中学校PTA会長 佐藤 圭一 氏 ○宮城県社会教育協会大河原支部長 高橋 久 氏 ○白石市子供会育成会連合会長 徳力 弘正 氏	約 50 人

2 意見聴取会の意見整理

「中間まとめ」の改善の方向性	主な賛成意見	主な反対意見
ア 受検機会について → 複数（3回）の受検機会を望む意見が多い		
<ul style="list-style-type: none"> ・複数の受検機会を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試験当日の体調不良という事例もあり、複数の受検機会を確保することはよい。 ・現行の受検機会3回の維持が望ましい。 ・現行の3回から2回に減じることは理解が得られない。 ・積極的にチャレンジできる。 ・前期と後期との間隔は1ヶ月あった方がよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の事務の簡素化にも配慮を。
イ 推薦入試について → 推薦入試の廃止を望む意見が多い ・出願基準の明確化と情報提供の充実を望む観点から ・学力向上を求める観点から → 特定校の高倍率と大量不合格者につながらない入試制度の工夫を望む意見が多い		
<ul style="list-style-type: none"> ・受検生の能力等を多面的に評価するという趣旨を生かしつつ、中学校長の推薦などの出願資格や選抜に関して改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・推薦制度を改善するという方向性はよい。 ・不合格者が多くいることについても課題がある。 ・推薦入試が中学校での選抜であることに課題がある。 ・保護者・生徒間の人間関係の摩擦にも課題がある。 ・推薦入試の導入時の主旨と現在でずれがある。 ・普通科においては、推薦入試導入自体が疑問。 ・学力検査が課さない点が問題。 ・高校が示している基準が抽象的であり、中学校の選考でも具体的ににならない。 ・面接，作文の対策が大変。 ・合格が一つのゴールとなり，弊害が多い。 ・合格後の指導の難しさ。早期合格後の手立てが必要である。 ・とりあえず推薦入試に出してみようという風潮がある。 ・受検機会が実質1回となっていることが問題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「多様化」とはどのような意味で用いているのか。 ・専門学科においては推薦入試があつてよい。 ・専門学科において目的意識を持っている生徒が学力がないということによって不合格となるのは残念。
<ul style="list-style-type: none"> ・募集定員の割合を現行よりも下げ，その範囲内で各高校が適切に定めることを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前期選抜は15%を上回らないようにしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前期選抜は推薦入試を残して全ての学校で30%以内とするのがよい。 ・割合を下げると高倍率化につながるのではないか。

「中間まとめ」の改善の方向性	主な賛成意見	主な反対意見
<ul style="list-style-type: none"> 各高校・学科毎に、求める生徒像や出願要件、評価項目や配点などの選抜方法について、可能な範囲であらかじめ公表することを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 推薦基準が明確でないので、明確に示す必要がある。 入試についての情報が不足しており、積極的に情報を提供する必要がある。 特に成績面の基準が具体的でないのが課題である。 中学校でも明確でないので、保護者にうまく伝わっていないことも課題である。 部活動の戦績、取得資格、評定平均値等、具体的に示す必要。 地域の人々にも浸透させる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 明確な出願基準は受検機会を狭めるだけでないか。
<ul style="list-style-type: none"> 選抜方法として、面接・作文のほか学力検査等を加えることも検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 推薦入試では、学力の低い生徒も合格している現状がある。 面接だけでは受検生のことを理解するのは難しい。 推薦入試後の学習意欲の低下に課題がある。 学区内の校長のアンケートでは前期選抜でも学力検査を課したいという意見が多かった。 学力検査は課した方がよい。 面接の評価基準は明確に示した方がよい。 学力検査問題は県教委で作問するが、独自問題も可能とする。 3教科でなく、5教科各40分ということも考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前期選抜において、面接、作文は必要ない。後期試験では学力検査に加えて必要。
<p>ウ 一般入試について</p> <p>→ 学校裁量幅の拡大を求める意見がある一方で、シンプルさを求める意見もある。</p> <p>→ 志望の動機については、選抜資料とすることに関して否定的な意見が多い</p>		
<ul style="list-style-type: none"> 調査書と学力検査による相関図表を用いた選抜方法について、学校・学科の特色に応じた学校の裁量幅の拡大について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査書と学力検査の総合審査は賛成。 総合評価を維持するならば相関図表の見直しは必要。 学校裁量幅の拡大は賛成。 比重を変える方法、加算する方法がある。 受検生に学校が選ばれるという意識を持ってほしい。 具体的な可能な幅を明示すべきである。 学力でない部分を評価することも大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様化の一方でシンプルさも大切。 高校の負担が大きくなるのではないか。
<ul style="list-style-type: none"> 各学校の選抜方針等をあらかじめ公表することを検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 可否の基準を明確に示すことも必要である。 明確に示す必要があるならば公表の範囲を示したガイドラインも必要。 	
<ul style="list-style-type: none"> 学力検査について、選択問題の有効性を含めその在り方について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ※中学校での学習の成果がためされる基礎的なものでよい。 ※学力検査におけるリスニングは1回とすべき。 ※生徒の力をはかれる選抜の材料かどうか大切。 	

「中間まとめ」の改善の方向性	主な賛成意見	主な反対意見
<ul style="list-style-type: none"> 出願に際しては、志望の動機が確認できるような方法を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己PRできるような志願理由書があるとよい。 出願理由は高校としても知りたい部分である。 意欲を高め、学力向上につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> 志望理由書は両面性を持ち、思いを伝える面とプレゼンテーション能力とは別な側面。 高校は通過点であり、最終の目標でないので、不要である。 意義は理解できるが、選抜の材料としたときに、中学校の負担が多くなる可能性がある。逆に選抜の材料にしないのであれば意味がない。 中学校の負担が大きくなる。 入試にキャリア教育的なものを入れるのは難しい。 郡部においては学校の選択肢が少なく書きづらい。
エ 第二次募集について → 現行制度の継続という意見が多い		
<ul style="list-style-type: none"> 生徒が新たな進路について前向きに考える契機となるような工夫が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ※現行のシステムでよい。 ※前期・後期の学力検査点を選抜材料にすることが可能にすると時期を遅らせて実施できる。 ※定員割れの多い仙北地区では第二次募集は必要。 ※第二次募集の実施時期は現行よりも少し早い方がよい。 	
オ 調査書について → 評定の客観性、公平性をより高めるような工夫を求める意見が多い → ①評定については、割合等について改善を求める意見がある		
<ul style="list-style-type: none"> 5段階評定の客観性、公平性をより高めるよう工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校により評定に違いがあり、より客観的な評価をするべきである。 評価の客観性に課題。県レベルの統一テストの結果を調査書に記載するのも一つの方法か。 5段階より、10段階評定のように細かく評価するのがよい。 	
<ul style="list-style-type: none"> スポーツや文化活動等で特に優れた生徒に記載する①評定の意義と改善の方向性、その他の記載項目の見直しの検討が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 校外の活動も評価できる仕組みの方がよい。 調査書は客観性が求められる。主観的なものはできるだけ避けた方がよい。 選抜の材料として必要なものという観点で改善を。早期に対応してほしい。 ①評定は割合がない方が使いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査書の簡素化には反対。選抜の材料として大切である。より詳細に記載してほしい。 ①評定も重要視して選抜にあたっている。
カ その他		
<ul style="list-style-type: none"> 十分な周知期間を確保することが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 入試は子どもの一生を決める大切なものであり、平成24年春にこだわらず、じっくり検討しても良いのではないかと。 	

改善試案				
試案A	試案B	試案C	試案D	試案A～D
賛成。 ただし、学力検査問題の作成及び前期選抜の検査問題、志願理由書、志望動機の明確化が具体的なものとして見えない点が課題。	賛成。 普通科の推薦入試の廃止は賛成。 専門学科の推薦入試は残すのに賛成。	出願要件に合致したものが希望するというのは納得。 賛成。 特色化選抜でも学力検査は必要。	第二次募集を加えたり、前期選抜の募集割合を減らすなどの改善するのであれば賛成。	※どれもよいとは言えない。一つの案にまとめて提示してもらえるとよかった。
A案に賛成。 前期選抜の二月初旬は学年末考査と重なることが課題。また、学力向上の観点から後期選抜、第二次募集は遅くしてもよい。	将来的に受検機会を2回にするのであれば、段階的にB案からD案に移行するのがよい。	賛成。 特色化選抜でも学力検査は必要。	賛成。 定員割れをする学校のことも考え、第二次募集もすべき。日程については前・後期の間を2～3週間程度あけるなどの検討が必要。後期の定員が少ないので、学力検査に加えて面接などの特色を評価する選抜も可能。	※A案～D案について、どれも望ましいと言えない。
賛成。 全ての学校で学力検査を課さなくともよい。	B案に賛成。 前期選抜の募集定員の割合は増やした方がよい。	C案に賛成。 県の課題としての「学力向上」を踏まえた場合、すべての受験生に学力検査を課すのがよい。	D案に第二次募集を加えるのがよい。 ただし、日程上の問題はある。	※試案A～試案Dについて、それぞれに課題があり、どれも良いとはいえない。
	現行の推薦入試の課題がクリアできていないことが問題。	C案をベースにして、特色化選抜でなく、推薦入試を継続実施。	将来的に受検機会を2回にするのであれば、段階的にB案からD案に移行するのがよい。	※普通科においては、推薦入試を廃止し、一般試験と第二次募集だけとする。
		C案がよい。	D案に賛成。 専門学科については、推薦入試を残してもよい。	※入試改善において、すべてを丸くおさめるのは難しい。対象(中学校、高校、生徒等)をじぼる必要があると考える。
		C案に賛成。 出願要件を明確に募集要項に示すことに賛成。 一般入試の時期が前倒しになってきている状況があるので、できるだけ遅くお願いしたい。 学力検査を課さない科目についての評価をどうするのか課題。 目的意識をもたせたい。	全ての生徒が2回の受検機会のあるD案をベースに改善すると良い。 B案の専門学科の推薦入試を加え、第二次募集も加える形。 前期選抜の割合は最大50%に。	※普通科の推薦入試の廃止は賛成。
	※B案かC案がよい。	※B案かC案がよい。	受検機会が一回少なくなる点、学習面と部活動等バランスをとるという点で問題が大きい。	
	※B案かC案がよい。 目的意識をもっている生徒に入学の場を与えるのはよい。	※B案かC案がよい。 目的意識をもっている生徒に入学の場を与えるのはよい。	A案～C案の前期選抜で学力検査を課すのであれば、D案は第二次募集がないことが問題。	
	※B案かC案がよい。 目的意識があっても推薦入試で入学しなくともよい。最終的にいければよい。 段階的に推薦入試を廃止するとよい	※B案かC案がよい。 目的意識があっても推薦入試で入学しなくともよい。最終的にいければよい。 段階的に推薦入試を廃止するとよい	D案は、2回に分ける理由が分らない。	
〈試案A～試案Cに共通する意見〉			D案は現実的ではない。	
※2月初旬は早いのではないか。実施時期は遅い方がよい。			D案は前期選抜で50%以上が決まるという点で、高校入試としては大変である。	
※出願要件に合致したものが希望するというのは納得。			D案には賛成しない。 前期の割合が大きいと入学後の生徒の意識に違いが生じるのではないかと。	
※前期選抜で少数をとるのであれば、後期選抜でも合格するはず。			実施困難か。 前期選抜の割合が、ほとんどの高校において90%となり、実質受検機会が1回に。輪切りに。定員割れの学校が増える心配も。第二次募集が必要。実施時期の検討が必要。	
※「高校が示した基準に合致する」はイメージがわかないので、とまどいがある。 多忙化の心配。			授業を進める上ではよいが、スケジュールは厳しい。	

3 意見聴取会での傍聴者からの主な意見要旨のまとめ

①傍聴者の主な発言 ※下線は複数の方の意見

〈受検機会〉

- ・後期日程でなら合格する子が、無理に前期を受けて落とされて泣く。3回ではなく2回がよい。
- ・チャンスの拡大といっても、勉強が苦手な経済的にも大変な子たちが2回やろうと3回やろうとどこにも受からないことが問題である。
- ・3回の受検機会の確保は賛成だが、子どものよさをさまざまな尺度でみてほしい。
- ・一般入試と第二次募集に追考査を加えて3回とする。

〈推薦入試〉

- ・推薦制度の廃止に賛成。
- ・推薦入試でショックを受けた子や問題が起きた例は、我々中学校現場の教師はたくさん持っている。
- ・専門学科に関しては推薦制度をそのまま継続してよい。

〈一般入試〉

- ・志願理由書も自分でアピールした方がいいというのはわかるが、その指導をしなければならないことになるかどうか。その場で本人が何か書いて、それを使って面接の材料にする程度のものならいいが、書類審査でいろいろな吟味をしようという方向性は公平性にも欠ける。

〈調査書〉

- ・推薦書とか調査書など教師の作文力で差がついたら困る。
- ・内申制度が重要視されているこの宮城県の制度はよくないと思う。
- ・①評定は選抜の資料として活用されている一方で、中学校ではその選考に苦慮している。

〈4つの試案〉

- ・和歌山県では2年前に特色化選抜を入れたが、2年後に廃止、その実態を研究してほしい。
- ・学力検査の実施を、3教科と5教科の試験とする問題をもう少し検討してほしい。
- ・一学区化に向けて、特色ある学校づくりということが命題になっているが、そのために選抜で特色化することはどのようなことなのか。
- ・普通科の特色を示すのは難しいのではないか。
- ・示された出願要件に無理に近づけようと努力する生徒が生まれるのではないか。
- ・旧学区に戻して、試案Dを細かく再検討していくというのがよい。
- ・現行の一般入試は調査書、学力点も含めて、子どもたちのよさを多面的にみている。現行の入試制度をさらに保護者に説明した上で進めるのがよい。
- ・4つの試案では、高校が示す基準というのは一体何なのか全く見当がつかない。
- ・秋田県は3倍で足切りをする制度を設けているが、調査書のみで不合格にされるという問題もある。
- ・高倍率になった場合、きめ細かく子どもを評価して合格、不合格を明確に判定できるか疑問。
- ・各学校ごとに裁量幅を認める割合、制度が複雑になる、シンプルな入試制度にすることが大切。
- ・前期選抜の募集定員の割合を低くすると、落ちる生徒が多くなり問題がある。

〈その他〉

- ・全県一学区になり、仙台で学力が高くない子たちは次々と仙台周辺に流れることも予想される。
- ・全県一学区導入の結果をみて、入試制度改善の結論を出すべきでないか。
- ・高校に入ることが最終目的ではない。その子にとってちょうどよいレベルの学校に入ることがよい。
- ・宮城県の高校の全体像を誰がどこでどのように審議しているのかを明確にしてほしい。
- ・意見聴取会があることをしっかり知らせるべきである。
- ・意見聴取会もっと回数を増やしてほしい。
- ・意見の発表者も公募してほしい。
- ・広報活動にもしっかり取り組んでほしい。
- ・高校は地域の学校という立場であるべきだと思う。
- ・仙台で意見聴取会をもう一度行ってほしい。
- ・子どもたちがこの制度をどう考えているか、生の声を聞く場を設けてほしい。

②意見記入用紙の主な記載事項 ※下線は複数の方の意見

〈受検機会〉

- ・複数の受験機会の確保を。
- ・入試事務の軽減を。
- ・複数の受験機会は不合格の生徒を生み出すだけである。
- ・追考査を実施し受検機会を複数にする。

〈推薦入試〉

- ・ 現行の推薦制度は廃止に賛成。
- ・ 推薦入試で合格する生徒は、一般入試でも合格する生徒である。
- ・ 現行の推薦入試では、多様な選抜尺度を用いるとありながら、現実には内申点で選抜されている。
- ・ 現行の推薦入試は基準が抽象的であり、評定平均値など具体的なものを示してほしい。
- ・ 募集定員に対する割合は下げて、推薦制度は残してほしい。さまざまな子どものよい面をみてほしい。

〈一般入試〉

- ・ 志望動機は中学校での日常の進路指導の中で行うべきもの、選抜には不要である。

〈第二次募集〉

- ・ 一般入試と2回の第二次募集がよい。

〈調査書〉

- ・ 中学校間の差が大きく、選抜における調査書のウェートを小さく。
- ・ 現行の調査書の活用では、3年で急にがんばった生徒を評価するのが困難。
- ・ 絶対評価による評定であり、選抜資料としての公平さに課題がある。
- ・ 選抜の資料として本当に必要な項目だけにしてほしい。

〈4つの試案〉

- ・ 一般入試と第二次募集の2回の受検機会だけでよい。
- ・ 普通科、理数・英語科は一般入試と第二次募集だけにして、専門学科の推薦入試は継続する。
- ・ 一般入試の際に多様な選抜尺度で選抜するのがよい。
- ・ 特色化選抜で普通科の特色を明確に具体的に示せるか。
- ・ 全県一学区のもとの特色化選抜は特定校において高倍率が予想される。
- ・ 事前に共通学力検査を実施し、各高校が入学資格者の点数幅を示し、希望する高校に全員合格できる仕組みを。
- ・ 前期選抜で定員の5割を合格させると多くの心を痛める不合格者がいるということになり、逆に学力低下につながるのではないか。
- ・ D案に第二次募集を加えた制度がよい。
- ・ 前期選抜の定員が少ないと、学校間格差が拡大することにつながる。
- ・ 他県の状況も確かめてほしい。
- ・ D案は私学との関係も大きい。
- ・ D案は卒業式との関係など日程上の問題がある。
- ・ シンプルな入試制度を。
- ・ 誰もが選抜結果に納得できるわかりやすい入試がよい。
- ・ A案に賛成。
- ・ C案に賛成。
- ・ 学力検査は全員に課すべき。

〈その他〉

- ・ 意見発表者は公募すべきである。
- ・ もっと意見発表会の広報活動をすべきである。
- ・ 仙台会場はもう一度やってもよいのでは。
- ・ 登米。栗原でも開催してほしい。
- ・ より一般の県民がみてわかりやすい資料の提示を工夫してほしい。
- ・ 現場の声をもっと反映させてほしい。
- ・ 各高校の募集定員についても考えてほしい。
- ・ 傍聴者の意見発表時間をもっと増やすべきである。
- ・ 全県一学区という大きな変化の中で、入試制度を変えるのかと驚いている。
- ・ 意見を述べる傍聴者も、所定時間内に、感情的にならず、論理的に自分の意見を述べる必要がある。
- ・ 傍聴者の中に傍聴のマナーを守らない人もいて、不快である。
- ・ 特色化づくりは不要、普通の学校でよい。
- ・ 全県一学区、男女共学化など大きな改革の周知をさらに取り組んでほしい。
- ・ 全ての子どもに高校教育を保障すべき。
- ・ 高校選択でキャリアを学ぶ、学校の特色を示してほしい。
- ・ 今回の改革が、進学塾が高校受検の主導権を握ってしまうのではないかと危惧している。
- ・ 私学との共存も視野に入れてほしい。
- ・ 高校進学は社会への通過点であり、高校進学で人生が決定されることのないようにしてほしい。
- ・ 特別支援を受けている子どもたちの入試の在り方も検討してほしい。
- ・ 改善の結果を早めに周知してほしい。
- ・ 労働の意義なども学校教育の中で取り扱うのに賛成。

4 意見聴取会での意見発表等概要

(1) 仙台会場

【日 時】	平成21年3月15日(日) 13:30~15:30		
【会 場】	宮城県庁行政庁舎2階講堂(仙台市青葉区本町3-8-1)		
【出席者】	意見発表者		
	仙台市立岩切中学校長	菊池 義廣 氏	
	多賀城高等学校長	武田 和夫 氏	
	塩竈市立第一中学校PTA事務次長	三浦 利政 氏	
	仙台市学校支援地域本部スーパーバイザー	山川由紀子 氏	
	仙台商工会議所議員	山口 哲男 氏	
	入学者選抜審議会委員		
	委員長 大桃 敏行		
	委員 鹿野 良子	委員 伊藤 宣子	
	委員 庄子 修	専門委員 山内 明樹	
	教育委員		
	委員 櫻井 弥生	委員 佐々木悦子	委員 勅使瓦正樹
	教育委員会事務局		
	教育長 小林 伸一	教育次長 菅原 通悦	
	教育企画室長 安住 順一	義務教育課副参事 本明 陽一	
	高校教育課長 高橋 仁	高校教育課副参事兼課長補佐 村上 靖	

〈意見発表要旨〉

○ 菊池 義廣 氏

- ・審議会の「中間まとめ」は、現行制度のよい面と課題とが適切な表現で示されている。
- ・スタートの時点では専門学科だけの推薦制度だったものが、普通科まで広がり、そのことによって本来の趣旨とは違う方向へ若干流れてきているのではないかという意見が、中学校の現場において、しばしば話されている。推薦制度を改善していくという「中間まとめ」であり、本当にありがたい。
- ・複数回の受検機会の確保が保証されたこともありがたい。入試当日、病気で結局受検できなくなる生徒というのは二、三百名に一人ぐらいいると思うが、過去に、公立高等学校も志願していた生徒が、予防薬を飲み、その予防薬が効き過ぎて体調が悪くなり受検できなくなったという例もあった。複数回の受検機会の確保は今後とも是非お願いしたい。
- ・調査書と高校で行われる学力検査の二つを合わせたものを「総合的な選抜制度」と表現するのであれば、これを今後も実施し続けてほしい。
- ・中学校側の進路指導主事のアンケート結果については、中学校側の事務の簡素化という観点から見れば、3回の受検機会というのは簡素化になっていないので、2回の方がよいという意見だと思う。この中学校側の事務の簡素化についても、中学校の校長として是非配慮してほしいと考えている点である。
- ・どこの中学校でも同じだと思うが、二つの観点で高校入試を考えていると思う。一つ目は「人材育成」という観点。社会に有為なる人材をつくり上げていくのは、私ども教育に携わる者の使命である。少子化も進んできた平成の時代の中で求められる人材がどのようなものであるかということ踏まえての「人材育成」はとても大事な観点だと考える。二つ目は「自己肯定力」という観点。子どもたちに「自分を肯定しながら前に進んで生きていく市民になりなさい」という観点も大切だと思う。この二つがバランスよく進んだとき、高校入試制度が最もよいものになると考える。

- ・ A案, B案, C案について。校内でも話し合いを持ったが、これまでの普通科の推薦に関してはどの案も「なし」であり、私たちの願いがかなったものと考えている。専門学科の部分についてはこれまでとおりの推薦制度も若干残していただく方が、私個人としてはよいと思う。
- ・ 第二次募集は、現行で行われているようなシステムで十分かと思う。
- ・ 前期選抜と後期選抜の割合は、中学校側の事情をいえば、前期選抜に関して15%を上回らない方がよいというのが私たちの結論である。

○ 武田 和夫 氏

- ・ 高校側の立場から意見を発表する。
- ・ 「中間まとめ」の趣旨からすれば、私はA案に賛成。ただし、学力検査問題の作成及び前期選抜の検査問題はどうかという点、志願理由書のイメージがよく見えない点、さらに志望動機の明確化について具体的なものが見えない点、この三つの点について今後検討願いたい。
- ・ 中学生や保護者の方々が3回の受検機会を望んでいることを考えると、D案というのは難しいのではないかと。前期選抜の割合が、ほとんどの高校において90%となり、実質受検機会は1回になってしまう。よい言葉ではないが、これまで以上の輪切りになる。さらに定員割れの学校が増える心配もある。D案を採用するのであれば、第二次募集がないと困る。実施時期の検討はもちろん必要になる。また、例えば、仮出願を行ってそれを公表した後に本出願をすることも考えないとならない。ただ、こうすれば入りたい学校を選択するという方向にはならない可能性は生じるものと思う。
- ・ 「中間まとめ」の改善に向けての基本的な考え方、あるいは改善の方向性として幾つか挙げられているが、その中で「多様な」あるいは「多様化」という言葉がよく使われている。この「多様化」がどこに焦点を絞っているのかがよく見えない。受検複数化という意味での「多様化」、中学生が幅広く高校選択ができるようにという意味での「多様化」、あるいは高校での選抜の方法における「多様化」などいろいろ考えられる。
- ・ それぞれ入試において、どのような目的で、どのような方法で選抜していくか、あるいは生徒を育成するかが今後の問題だと思う。
- ・ 第二次募集について、前期あるいは後期の学力検査点を選抜資料にすることを可能にすると、時期をもう少し遅らせてもできる可能性がある。ただし、前期あるいは後期の挽回のチャンスがなくなるというデメリットはある。
- ・ 一般入試の学力検査と調査書の総合評価を維持していくのであるならば、相関図表の見直しを考える必要がある。高校としては中学校から提出される調査書を非常に信頼して相関図表を見ていく。また、**①**も重要視している。
- ・ 絶対評価導入後の5段階評定について客観性、公正さの維持が課題であり、評定の基準がまちまちであると「中間まとめ」に出ているのを見て、私はびっくりしている。
- ・ 学力検査点と調査書点の比重が1対1でなくてもよいし、学力検査点と調査書点を加算するという選抜方法もあると思う。
- ・ 調査書の簡素化については、高校側としては調査書を信頼し重視しているので、調査書が簡素化されると、選抜するための判断材料が非常に減ってしまうことが心配である。中学校の3年間で育ててきた生徒の良さとか成長過程がわかるように、是非詳しく記載してほしい。
- ・ 私たち高校は入学してきた生徒の進路希望を達成できるようにいろいろな方法で支援している。また、いろいろな取組を行って特色を出そうとしている。そのことを知っていただくために中学校訪問、オープンスクールを実施したり、ホームページや学校通信などでも紹介している。また、授業公開など実施しているので、中学校の先生方も是非各学校の取組を見ていただきたいと考えている。
- ・ 高校では入試業務においてミスがないことが当たり前と考え、非常に緊張感を持って業務を行っているが、中学生のことを考えると受検機会を多く確保してあげなければと考えている。中学校の進路指導主事の先生方の75%が2回、一般入試と第二次募集だけの受検を考えているということであるが、いくら手間がかかっても、複数回の受検機会を確保する方がよいと思う。大所高所から結論を出していただきたい。

○ 三浦 利政 氏

- ・中学校の保護者の一人として、推薦入試についての意見を発表する。
- ・推薦入試というのはメリットもあるしデメリットもあると思う。目的意識が明確で意欲のある生徒が高校に入学するというのは、高校にも生徒にもとてもよいことだと思う。一方で、推薦入試で合格した子で、学力が低い子が少なからずいるという話を耳にするが、この点はデメリットの部分である。
- ・高校の推薦の基準がどのようなものなのか明確にわからないということも課題である。中学校での推薦基準もわからないところがある。
- ・推薦入試において結構な数の子が不合格となること、また、一般入試でも合格の枠が30%減るといふのは問題である。30%減ることに親も含めて子どもも重圧を感じる。その重圧をはねのけて入学した子どもは入学してから、推薦入試で入った子どもと若干差がついてもおかしくないと感じた。これも推薦入試のデメリットの部分である。
- ・その後の学力の差と、一般入試の負担を最小限にすることが私は望ましいと思う。
- ・推薦入試は校長先生のお墨つきがもらえるはずだが、実際にはたくさんの子が推薦で不合格になることに私はびっくりしている。
- ・今回の「中間まとめ」の試案のA案からC案については、出願要件に合致するものが希望できるという部分はとても納得できる。
- ・高校側から、出願要件に合致するものやその内容について明確に示した上で学力検査と面接をし、公平にやっていただければ、私は特色化制度というのはとてもメリットがあると思う。
- ・試案のC案がよく、公平に選ぶためにも特色化の中でも学力検査は必要なのではないかと考える。
- ・保護者の立場として子どもたちを見て一番感じたのは、「これだ」と思えるような一本筋の通った部分があれば、その子はきっと必ずいつか自分で道を切り開いていくものだと思う。生活態度がきちんとしてできなくても一本筋が通っているところがあれば、これから学力や人間性の向上は望めると思う。そのような意味において、改善試案の中の学校裁量の幅の拡大はよいことだと考える。例えば、中学校の1年生、2年生のとき不登校だった。でも、頑張っ出てられるようになり、3年生になって勉強もするようになり、学校が好きになり、一生懸命頑張れるようになった。このような子どもの道が開けないようでは寂しいと思う。
- ・受検機会の3回は私も賛成である。機会を二度与える、三度与えるというのは、これからの子どもたちが変わるためにもいいチャンスであると思う。

○ 山川 由紀子 氏

- ・入試制度が変わることはとても大事なことであり、特に小学校高学年の子にとってはとても大きな変化になる。その立場になってから「えっ」というのではなく、やはりたくさんの方の方がまず関心を持って、この改革についての意見を話したり、その情報を自ら進んで聞きに行くという姿勢が必要だと思う。
- ・今の推薦入試の在り方については、たくさん問題点があると感じている。まず、中学校の中でふるい落とされるということ。子どもたちの間、保護者の中で、人間関係の摩擦が起こることがある。余計な摩擦を増やすような制度はやめていただいた方がいい。
- ・今の中学生は学校だけではなく、例えば、地域の中でのボランティア活動など、たくさんの自分の生活を持っている子がいる。また、自分のよいところを中学生がしっかりと見つめて、自分自身の言葉で志願理由書を書けるような制度にすれば、中学校の中だけではなく、いろいろな姿を自分できちっとPRできることが可能になる。
- ・入試全体について情報不足だと思う。高校の情報がまだまだ足りないと感じている。もう少し積極的に保護者と生徒が自分たちの進路を考える必要がある。中学校の先生方に事務手続を任せきりにしてしまっている点が、保護者の意識も高まらない原因である。高校入試のときから保護者と生徒がきちっと情報をつかみ、自分たちの志望する学校を検索し受検する必要がある。
- ・子どもたちが将来自分がどのような職業につき、どのような生き方をするかという点で、高校入試というのは一番最初に選択する部分である。親と一緒に一生懸命入試に取り組んでほしい。
- ・県立高校の共学化ということもあり、特色を持った高校が生まれていると聞いている。特色のある高

校をどのように選ぶかについて、高校側からあらゆる手段で情報を発信してほしいと思う。

- ・ 検査方法について親と子どもが把握した上で受検に臨めるような詳細の公表についてお願いしたい。
- ・ 前期選抜でも学力検査をするべきであると、私自身は考える。
- ・ 子どもにとって3回の受検の機会は大変助かる。子どもたちが何回も受検する機会を与えていただくということは保護者にとっても大変助かるので、3回の受検機会と学力検査の徹底ということで、私もC案に賛成したい。

○ 山口 哲男 氏

- ・ AからDの4つの案については、どれも納得できない。喜んで選択できる案はなかった。
- ・ 私が考える子どもたちへの思いというのは、まず子どもたちにわかりやすく何かを語り、わかりやすく自分の進路を選んでもらうことである。
- ・ 3回受検はいいと思う。子どもたちにとって高校に行くということは当たり前の中である。行かない方がおかしいような見方をされており、かなり負担になっていると思う。その負担を解消する意味でも、まず行けるところをちゃんと見つけてあげる。また行ける機会を与えてあげるという点では3回ないと、やはり今の制度、今の状況からは無理だろうと思う。
- ・ 「中間まとめ」の中に志願理由書があるが、どういったことをどのように書くのか、書く子どもの表現力だとかその持ち味をどう読むかによって、本当の学力とは違った判断がされる可能性が出てくる。使い方に対しては慎重であるべきだと思う。ただし、専門学科、芸術学科に関しては、やはりその思いやいろいろなものを酌み取ってあげるという点で残してもよいと考える。
- ・ 面接・作文について、私は3回の可能性があるとするならば、1回目には面接・作文はいらなと思う。
- ・ これはD案に近いが、1回目に仮に半分ぐらいの定員で、まずは自分で行ってみたいところに受検してごらん、ということで出願する。そして仮に不合格であればその後自分なりにここでよかったのかと判断しながら、自分の気持ちをもう1回奮い立たせて受検校を選ぶということがあってもいい。2回目には面接。子どもの負担を減らすのであれば、1回目には学力。2回目のときも学力が中心だけれども、自分たちのいいたいことをちゃんと聞いてもらってから判断をしてもらうことが、子どもにとってはわかりやすいと思う。
- ・ 学力検査については、9教科なら9教科全部が大事なものだと思う。しかし今は9教科というわけにいかないから、せめて学力検査も5教科ずつやった方がよい。ただし、基礎的な勉強をすれば十分に答えられるものに限って、点数ならみんなが80点以上とれるようなもので構わないと思う。
- ・ 点数で落とすというよりは定員で落とすしかないわけだから、中学校時代の勉強がそのまま素直に受検につながるような、特別なところに通って受検勉強しなければ受検できないようなことではなく、この場合、先生方の授業が問われる面もあるが、先生方にしっかり教えてもらい子どもが自然にそれを身につけることができるという、そのレベルで受検をするというのが、中学校からの受検にとっては大事なことだと思う。
- ・ 中学生生活を子どもたちに満喫してほしい。十分に楽しんで、遊んで、そして部活もして、いろいろなことをして中学時代を終わって、受検に向かってほしいと思う。受検だけ、勉強だけで3年間を過ごす中学時代でないことを願う。
- ・ 学校裁量幅というものがあるとすればそれはいいと思う。明らかにした上で、子どもたちにこの学校はこういう裁量幅で、こういう部分で認めてもらえるということを理解した上で受検させることが大切だと思う。
- ・ 特に高校は選ぶ側ではなくて選ばれる側だという理解を持って、高校では入ってくる子どもたちへのいろいろなサービスは当たり前である。
- ・ D案の改善をすることを前提とするならば、D案の改善案を私は支持したい。

〈質疑応答要旨〉

○ 山内 明樹 専門委員

- ・菊池校長先生への質問であるが、前期選抜の割合についての考えをもう少し詳しく聞かせてほしい。

○ 菊池 義廣 氏

- ・前期選抜の合格者数とその割合については、前期選抜の数は多くならない方がよいと思う。中学校では、3月6日、7日あるいは10日ぐらいで卒業式を迎えるが、早い時期に合格者が大量に出るのは、中学校生活にプラスの影響だけでなくマイナスの影響も出てくる。割合という点からは少ない方がよいと思う。

○ 鹿野 良子 委員

- ・武田校長先生への質問であるが、まず、中学校の立場からいえば、決して中学校は手を抜いていないし、一生懸命頑張っている。十分御理解いただきたい。中学校は調査書の簡略化を考えているが、高校の校長先生として例えば具体的にどこでしっかりと書いた方がよいのか、教えてほしい。

○ 武田 和夫 氏

- ・調査書について一番見たいのは、特別活動の記録とその他の事項。要するに3年間どういう生活をしてきたかをもっと見たい。5段階評定は記載のとおり私たちは判断するしかない。また、例えば国語だと1年生から5, 3, 2となっているよりは3, 4, 5となっている方が、頑張ってきたというのが見えると思う。観点別評価も当然見させてもらっている。Aの数などを見ている。特別活動の記録で、何々委員と書かれているだけのものと、このようなことをしてこういう成果を出して頑張ったと、という記述とは違う。受け取る側として、しっかり見させてもらっている。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・先ほど山川様から、子どもたちは学校以外での生活の部分も大変大きいですが、そういった部分も調査書で示せるようになればというのがあった。中学校あるいは高等学校に御希望等はあるか。

○ 山川 由紀子 氏

- ・子どもたちの生活を見ていると、以前は本当に中学校の中だけで、特に部活と勉強だけで生活が終わってしまったようなところがあった。今は例えば民間のスポーツ団体に行っている子どもとか、学校の部活になじめなくて、地域の中で自分の力を何とか発揮できるところで頑張っている子どもなども見受けられる。
- ・私としては、これは山口さんの意見と真っ向から反対するが、自分のよいところをきちっとアピールできるような人間に育ててほしいと思う。中学校の中だけではなかなか先生方に理解していただけないときもあると思う。自分のよいところをきちっとアピールして、その志願する学校に自分はいりたんだということを伝える一つ的手段としてほしいというのが私の先ほどの発言の趣旨である。

○ 伊藤 宣子 委員

- ・菊池校長先生にお尋ねしたい。いわゆる前期選抜という形で特色化選抜を実施したとして、割合の方はそれほど高くない方がよいとお伺いしたが、今現在中学生は、最初に推薦入試で合格すると学年の中でどんな役割を担っているか。プラス面とマイナス面をお聞かせいただきたい。

○ 菊池 義廣 氏

- ・本校の例だが、マイナス面が出ないように、推薦合格者全員を校長室に集め、「校長は君たちに次のことをお願いする。岩切中学校は君たちに何をなし得るかを問うなかれ。君たちがこの岩切中学校に何をなし得るかを聞いたまえ」と話した。合格した翌日から、合格者は全員冬の寒い中、来賓玄関を毎朝雑巾がけしてくれた。何をなし得るかということで本人たちが考えてやったことである。ちょっとおかしいのではないかという御意見もあるかもしれないが、質問に対する回答である。よかったのか、よくなかったのかはまた別問題だが、渋々やっていたのではなく、喜んで取り組んでいた。
- ・マイナスの部分については直接私自身は目にしてはいない。ただ、過去のことをいえば、合格した子

どもとそうでない子どもとの間の軋轢、御家庭同士のずれ、というのが幾つかあったようだ。一般で合格するのと、推薦で合格するというのでは受け止め方に違いがあり、子どもたちの中でのずれは生まれてくると考えている。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・ 試案のA・Bの一番の違いは、Bは専門学科で推薦を残しているというところである。試案のA・BとCの一番の違いは、A・Bは3教科以内の学力検査を高校の判断で実施することが可能になっているのに対し、Cは3教科の学力検査を必須としている。つまり1月末から2月初めに行われる前期選抜でも、3月に行われる後期選抜でも、学力検査をするというのがC案である。D案は、受検機会が2回になるので、A・B・Cと大きく異なることになる。先ほど問題があると御指摘があったが、仮に定員の90%を前期でとり、なおかつ後期で生徒の特色を見るということは、大学の前期日程・後期日程に近いところがあると思う。
- ・ 菊池先生は先ほど推薦の問題点を御指摘しつつ、基本的にはB案がよいという御意見だったと思う。武田先生はA案の御支持、三浦様、山川様はC案であった。山口様は突き詰めていくと基本D案で、D案の改良パターンということになるかと思う。
- ・ 御発言の中で3回の受検機会は必要ということもあったので、D案プラス第二次募集を加えるという形か。受検の日程をどう組むか、日程上の難しさがあるかもしれない。試験というのは子どもたちにもわかりやすくなければならないということであった。1回目は学力検査を実施し、むしろ2回目の方で学力検査と面接等を行ったらどうかということだった。志願理由書はいらないとの話であったが、調査書等はどんなふうにお考えになっているか、御意見を伺いたい。

○ 山口 哲男 氏

- ・ 調査書を書く側と書かれる側の関係というのは、人によってみな違ってくるのは当たり前だと思っている。一律に比較して順番をつけるのは無理だと思う。人が人を判断するというのは、並大抵のことではないので、まず中学校の先生に強いていること、それを高校の先生が読み取ること強いていること、これは無理なことだと思う。現実にはどんなことをやっているかを書いたものを出すだけなら客観的でよいかと思うが、それをどう判断するか、それを判断の最も大きな材料にするというのは少々無理だと思う。
- ・ 以前から調査書に関しては疑問を持っていた。客観性ならよいが、主観の入ったものに関してはなるべく避けてあげた方が子どもたちは納得できる。子どもは、自分で勉強が足りなかったと思えば、それはそれで納得できる。しかし、勉強は頑張ったけれども調査書の方ができなかったから、と落ちる理由を探すと自分がかわいそうになってくるような気がする。不合格となる理由がわかりやすい方がよい。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・ その場合、中学校の教科の成績というのがもちろん必要になると思われるが、生活面の記述をどう細かく書くか。そこに主観が入るので差が出てくるはずだが。例えば何々の委員をやったという記述はどうであろうか。

○ 山口 哲男 氏

- ・ 全くいらないと思う。中学校で何々委員をやったからよいのかではなく、例えば、私の息子は生き物係を本当によくやっていたが、それは評価されるためではなくて、好きだからやっていた。評価してもらっても、本人はうれしいとは思っていないと思う。
- ・ 実は役についていなくても運営に対して協力的であれば、その人は役についた人に対するちゃんとしたサポーターであったはずであるが、それは評価されない。主観が入る書き方になってしまう。どうしても何々委員長をやると偉そうに見えるが、委員より委員長の方が上だと考えること自体無理がある。判断が正しいかどうかは別として、評価の材料にするのは私は嫌いだと申し上げたい。
- ・ 学校で勉強したものがそのまま受検に出てくるという程度の学力検査問題でいいはずで、ひねったものを出す先生もおかしいが、それに対して答えられなければならないという受検体制がもっとおかしい。できれば教科書にある内容だけで受検をしていただきたい。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・いろいろな面で意義ある、あるいは学校から離れたところで活動する場合もある。静かに図書館で本を読んでいるのがなぜ悪いのか、ということにもなる。ここをどうとらえていくかが非常に難しいところである。
- ・各学校の裁量幅を広げたらどうかということがあった。各学校で特色を出すこととつながるが、高校の方で全部横並びでわかりやすくというのがいいのか、この点については、どうか。

○ 山口 哲男 氏

- ・高校入試は高校が選ぶものではなく、高校が選ばれるものだと思っている。
- ・子どもたちに「私たちの学校はこのようなところを重視しますよ」、「うちの学校はこういう生徒がほしい」といえば、それに合わせて受検をしていく態勢が子どもたちにできる。そのような選択ができなければ学校に行く意味がない。
- ・高校はその次の、社会に出るか大学に行くかの一つの通過点でしかない。通過点を最後の目標だと考えず、選択をしながら子どもたちも意思を出していく。志願動機はいらないと申し上げたのは、そこに行きたいから受検すると考えれば、志願動機などは全く意味がないからである。ただ、専門学科は若干違うと思う。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・基本的に普通科についての考えで、専門学科等は場合によっては面接なり推薦があってもよろしいということか。

○ 山口 哲男 氏

- ・2回目の受検に関しては、どの学科にも面接があつていいのではないか。どうしても実力を発揮できなかった子どもが、実はこんな思いを持ってこの学校を受けているということを面接で聞いてもらえれば、それによって例えばぎりぎりのボーダーラインのところの子どもを、ひよっとしたらすくい上げることができるかもしれない。チャンスを与えてあげて、その気持ちを酌み取ってあげるという機会を与えたい。
- ・先生方が面接するわけなので、それは主観で面接することになる。客観性を持って数値で表すことはできないだけに、そこでの何か自分なりの自己主張はあった方が子どもたちにとっては納得できるのではないか。ただし1回目も面接、2回目も面接では子どもたちが疲れてしまう。それから面接の仕方を教えることは必要がないと思う。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・菊池様への質問であるが、推薦の在り方、調査書の在り方、受検機会を何回設けるかなどもあるが、調査書、志願理由書に関してはどうか。

○ 菊池 義廣 氏

- ・調査書については昔と比べるとだいぶ簡略化している。
- ・一番注目しているのは、志願理由書のような紙でアピールしていくものには両面性を持っているということである。一つは、よく作用していく面でいうと、自分の熱い思いをその紙に書き、それを読んだ高校の先生方が「ああ、こういう子どもだったら是非入ってきてほしい」と願うような子どもを見つけることができるということである。その一方、何かの試験に受かるための上手な書き方やアピールの仕方を教えてくれる専門学校のようなものがたくさんあるので、形骸化が進む可能性がある。
- ・本来ならそれを小学校、中学校で全員に身につけさせて、アピールやプレゼンテーションの仕方も勉強のうちだと考えてやればいいが、これを一つの学力と考えるのか、それとも学力の外にあるものと考えているのかということの方が大きな分かれ目である。

〈傍聴者からの意見要旨〉

- ・推薦制度は、多面的な評価により、子どもたちが無用に、しかも、早期に傷つく。青田買いされなかった子どもが傷つく。学力でとられていくと、ああ、やっぱりそういう子だけが早くよい思いをする、と見ている他の子たちもいる。だから傷つくのはその落ちた子だけではなく全員である。

- ・推薦書とか調査書など教師の作文力で差がついたら困る。
- ・志願理由書も自分でアピールした方がいいというのはわかるが、その指導をしなければならないことになるかどうか。その場で本人が何か書いて、それを使って面接の材料にする程度のものならいいが、書類審査でいろいろな吟味をしようという方向性は公平性にも欠ける。
- ・和歌山県では2年前に特色化選抜を入れたが、2年後に廃止を決定した。その実態を研究してほしい。
- ・もし3教科のテストを実施するとしたら、それに落ちた子たちが今度は続けて5教科の試験を受けるという問題をもう少し検討してほしい。
- ・全県一学区になり、全県入り乱れての競争が始まる。仙台で学力が高くない子たちは次々と仙台周辺に流れる。推薦入試も絡んで、仙台の子たちがものすごく苦勞するのではないか。
- ・チャンスの拡大といっても、推薦入試で受かる子は決して学力は低くないので、一般入試でも受かる。私たち中学校教師の立場からすると、問題は勉強が苦手な経済的にも大変な子たちが2回やろうと3回やろうとどこにも受からないことである。
- ・推薦入試でショックを受けた子や問題が起きた例は、我々中学校現場の教師はたくさん持っている。是非次回からは、中学校現場の教師を各会場に二人置いてほしい。
- ・高校に入ることが最終目的ではない。その子にとってちょうどよいレベルの学校に入ることがよい。
- ・内申制度が重要視されているこの宮城県の制度はよくないと思う。後から勉強し始めて本当に勉強が好きになった子が高校に入れない。そういう子たちの方がむしろ優秀だったり、高校に入ってから伸びる可能性があるのに2、3ランクも落とす。それでも内申が悪いから入れない。学校の格差というのが激しい。内申の割合をもっと減らしてよいと思う。
- ・この意見聴取会の「中間まとめ」だが、広くこの入試に関して意見を交換しようという趣旨であるならば、AからDの試案を示すべきではなかった。議論が深まったところで試案が出てくるならまだいいと思うが、この段階では早過ぎたのではないか。
- ・一学区化に向けて、特色ある学校づくりということが命題になっているが、そのために選抜で特色化することなのか。これは自分の力に合ったところを最初から選びなさい、と幅を狭めているのではないか。一学区化は選択の幅を広げることを宣伝しているが、それとは逆の方向ではないか。
- ・宮城県の高校の問題としては序列化の解消が緊急の課題であり、私は山口さんがおっしゃったように試案Dをもう少し検討していく方向がいいと思う。地域に根差してということを見ると、全県一学区化の中では絶対無理である。旧学区に戻して、試案Dを細かく再検討していくというのがよい。
- ・県教委がこの推薦制を廃止の方向で考えているのは、大賛成である。専門学科では、例えば農業をやりたい子は、志望動機がはっきりしているから、我々も一生懸命書ける。しかし、例えば一高に入る子が志望の動機を書く場合、彼らは本音をいうと、そこに入って大学に行きたいのだが、そんなことを本音では書けないから一生懸命作文する。適当なことを作文して志望動機として実態と違うことを書いて出す。中学校の先生方も加担しなければならず、一生懸命応援して全く実態と違うことを書いて出す。それを高校の先生がまともに判断して可否の対象にしているとは全く思えないし、そういう意味では全く我々はむだな作業をさせられていると感じている。
- ・入選審で高校教育の問題を語り合っているが、実はもう一つ、将来構想審議会がある。一体、宮城県の高校の全体像はどこで話し合うことになっているのか。宮城県の高校の全体像を誰がどこでどのように審議しているのかを明確にしてほしい。
- ・今回の意見聴取会の持ち方について。2月19日の第3回の入選審で意見聴取会をすることが決まり、それからまだ1ヶ月もたっていない。大事な問題なので、もっとたくさんの方が来て当然ではないかという御意見もあったが、そのとおりでと思う。意見聴取会があることをしっかり知らせるべきである。またもっと回数を増やしてほしい。意見の発表者も公募してほしい。
- ・子どもたちの多様な能力を評価するため推薦制度をしているが、実際には、3年間の9教科の評定の合計点でラインがしっかり引かれている。3ポイントぐらいの差の逆転があるのはAだけである。Aについて、必死になって学校で話し合いをする。生徒会で頑張って学校の行事を推進した生徒と、県大会で上位入賞した子と、どちらがAにふさわしいのかを、何時間もかけて話し合いをしている。例えば同じ県大会の上位入賞した子たちが、学校によってはAのつく子とAのつかない子が出てくる。
- ・3回でなく2回でといっているのが、私たちが楽をしたいからとしかとらえてもらえない。今回特色化選抜ということだが、結局は学力で合否が決められていくのではないか。結局、後期日程でなら合格する子が、無理に前期を受けて落とされて泣く。そういうことが繰り返されるだけではないか。そう考えるので、3回ではなく2回。そこを是非わかってほしい。

(2) 石巻会場

【日 時】 平成21年4月19日(日) 13:30~15:30

【会 場】 宮城県石巻合同庁舎5階大会議室(石巻市東中里1丁目4番32号)

【出席者】 意見発表者

宮城県石巻工業高等学校長	渡邊 幸雄 氏
石巻市立住吉中学校教諭	黒沼 俊郎 氏
登米市佐沼中学校PTA会長	加藤 義憲 氏
石巻市PTA協議会事務次長	田村百合子 氏
大幸工業株式会社代表取締役	廣中 孝彦 氏

入学者選抜審議会委員

副委員長 菅野 一仁	委員 小野寺千穂子	専門委員 小畑 研二
------------	-----------	------------

教育委員

委員長 大村 虔一	委員 櫻井 弥生	委員 小野寺征人
-----------	----------	----------

教育事務所

東部教育事務所長 熊野 充利
東部教育事務所登米地域事務所長 高橋 幹三

教育委員会事務局

教育監 菅原 通悦	教育企画室長 安住 順一
義務教育課長 竹田 幸正	高校教育課長 高橋 仁
高校教育課副参事兼課長補佐 村上 靖	

〈意見発表者要旨〉

○ 渡邊 幸雄 氏

- ・本校の推薦入試では、各教科の評定、中学における活動内容、面接をそれぞれ点数化して判定の資料に使っている。授業や諸活動の中心になっている生徒も多く推薦制度は一定の役割を果たしてきた。
- ・「中間まとめ」については、概ね同じ認識で賛成である。学校、学科の特色に応じた裁量権の拡大とあるが、事前の公表とセットでなければならない。様々なメニューが並んで受検生がどれが自分にとって有利なのかよくわからないこともあり、もちろん多様化は大事であるが、シンプルにわかりやすくと思っている人も多いのではないかと思う。
- ・志望の動機が確認できる方法として、志望動機を書かせることは非常によい。自己アピールができる生徒を育てることが大切だ。しかし、中学校にとっては負担になるのではないかと思う。それが合否に少しでも影響するとなれば、中学校側は非常に神経を使うだろうし、もし影響しないとしたらそれは何だということになる。
- ・改善試案のD案に賛成である。しかし、D案も改善が必要である。AからC案は共通する部分が多く、基本的には前期選抜の部分は現行の推薦を改善した形という。中学校長の推薦を外し自己推薦のような形へ、さらに3教科の学力検査も課し、あるいは課すことができ、学力の保証もしようということだろう。特色化選抜の理念も理解できるが、前期選抜において少ない割合で選抜するということは、多数を対象とした後期選抜でも合格するような生徒をとることになる可能性が高い。したがって、受検機会の複数化は力のある生徒の機会の複数化ということになる。受検生が多いと面接などきめ細かな選抜は現実には難しいので、志望動機のほかに評定や、部活動等の実績が何以上など出願の段階で対象を絞ることも必要になってくる場合もある。
- ・不合格になった生徒が、後期で3教科から5教科へ教科数を増やすことは、生徒の負担が大きくなるのではないかと思う。今回の入試改革には受検生と高校のミスマッチを少なくするという視点も重要である。

- ・D案は、募集定員の多くの割合を前期で選抜する。これは現行の一般入試の選抜の考え方に近い。もちろん前期選抜の中で特色ある生徒を選抜することも可能である。後期選抜は事前に出願して前期発表後にすぐ行うというわけにいかないと思うので、前期選抜と後期選抜の間は2から3週間程度は必要である。受検生も、前期選抜で不合格の場合に後期選抜をどうするかを考えておく必要がある。後期選抜は前期選抜よりも少ない人数の選抜になるので、3教科の学力検査に加えて面接などの特色を評価する選抜を行うということも可能である。
- ・案を考えるときには、理念や哲学が大切であるが、同時に日程や出願や選抜に係るコスト、具体的には問題作成や調査書作成、選抜処理、受検生の負担なども無視できないと思う。
- ・2回学力検査を行うことは高校側の精神的な負担が大きいと思う。英語のリスニングは1回にして、後期では実施しないこととしてほしい。
- ・D案でも、生徒数の減少にともない定員割れの学校は出てくると思われる。これは社会的に見て非常に大きなロスで、第二次募集をして少しでも定員を埋めることは必要である。また、生徒にとってもセーフティーネットになり得る。
- ・D案では日程も問題である。D案あるいはD案プラス第二次募集は、中学校では多くの生徒が合否が決まった中で、後期選抜の生徒への対応という問題を、高校では今よりも長期間入学試験に拘束され授業時数が減らざるを得ないという問題を抱える。現行制度において中学校の卒業式は一般入試と発表の間での実施であるが、合格の決まっていなかった少数の生徒を指導する状況での卒業式になる。いずれにしてもすべてを満たす案はないが、D案では日程が大きな課題である。
- ・今後の審議会に対しては、先行している他県の状況等も踏まえ、メリット、デメリットなどをさらに詳細に示し、あわせて、最終的に何を優先したのか、なぜ優先したのかを示してほしい。

○ 黒沼 俊郎 氏

- ・中学校の教務主任という立場から意見を述べたい。最初に、仲間や勤務校の先生方から聞き取った内容を発表する。
- ・推薦入試が導入されたときの趣旨と少しずれているのではないかと。人物的に申し分ない生徒を校内推薦しているが、実際には評定の数値のみの選抜になっていると感じている。こういう入試制度が続くのであれば、推薦入試、一般入試、第二次募集の3度の受検機会は多いように思う。一般入試で十分対応できる。
- ・県の推薦入試の基準は抽象的である。特に成績面が明記されていないので保護者の理解を得るのが難しい。また、各学校で持っている校内選考基準についても保護者にとってはわかりにくい面がある。
- ・高校側から評定の基準が具体的に示されていない状況で、中学校では内々で持っているデータで推薦者を決めている。一部の保護者や生徒は推薦入試でいち早く合格することをねらい、自分の志望高校を選ぶ際に作戦のようなものが見られる。
- ・各高校が求める生徒像をもっと具体的に提示してもらいたい。先生方が保護者に説明しやすくなると思う。
- ・推薦入試で進路が決定し目標を見失う生徒がいる一方で、一般入試組が着実に力をつけ高校入試後には逆に学力的に追い越されてしまうというケースもある。
- ・現状の推薦入試制度では、各中学校での校内選考基準を持って推薦しているものの、それがうまく家庭、保護者、生徒自身に伝わらず、感情面での課題が浮き彫りにされることがある。
- ・推薦入試の合否が最終的には成績だけで決められている印象がある。高校側から基準を明確に打ち出してもらった方が生徒のためによい。受検に向けて一斉に指導するためにも、現行の推薦入試は無くした方がよい。一般入試前に推薦で不合格だった生徒が精神的に不安定になることも防げる。
- ・各中学校によって学習に対する評価の仕方や学習の内容が違うので、各中学校から推薦された生徒の学力を同じ基準で判断してほしい。また、評定だけでなく調査書の内容もしっかりと合否の判定に加えてほしい。
- ・教師と保護者の考える推薦観にギャップがある。調査書と学力検査で決めた方がすっきりしてよい。ただし、少子化の時代でもあり、定員割れが見られるので、受検機会については検討すべきである。
- ・推薦入試において、面接だけで生徒の本当の姿を理解できるのか疑問である。推薦入試の面接で、不

快な質問をされた受検生もいたとも聞いたことがある。

- ・推薦書や調査書は、子どもたちのよさについて、よい結果につながるように思いを込めて書いている。高校側でもしっかり受け止めてもらえるような調査書の在り方を望む。
- ・A案の中の「高校が示す基準に合致する」について、中学校としては戸惑いがある。中学校では、生徒にも保護者にもきちんと説明のつくクリアな基準、具体的な数字や評定を求めているのであり、A案の問題であると考え。
- ・B案については、普通科がA案と同じで専門学科が推薦入試の継続というようになっているが、入試事務において多忙化につながるのではないかと思う。
- ・D案では、2月中旬から3月中旬の2回に分けて選抜を行うことは、カリキュラムを進める上では少し余裕が持ててよい。ただし、校内での考査やまとめの活動などの卒業期の動きを考えたときに、慌ただしくならないかと思う。
- ・4つの試案それぞれに課題や問題点がある。中学校の先生方が子どもたちのために一生懸命書類を作成し、子どもたちのために頑張っているというその思いがうまく通じる仕組みがよいと思う。理想論かもしれないが、事務的な軽減化とともに、子どもたちのよさが全面的に出る仕組み、例えば、1・2年生のときに一生懸命頑張っている子どもたちがいることをうまく高校側に伝えられないものかと考える。また、入試において現場の思いをうまく酌み取ってもらえないものかと思う。

○ 加藤 義憲 氏

- ・高校1年生と中学2年生の子どもがおり、今後どのように入試制度が変わるのか、心配な面と不安な面がある。
- ・保護者の7割以上が3回の受検機会を希望しているが、この推薦入試制度を撤廃するか、このまま続けるかによっても変わってくるはずである。
- ・子どもが学校から推薦を受けるに当たり、推薦されるかどうかについては最終的には校長の判断ということで、特に明確な具体的な説明がなかったので、学校から連絡が来るまでとても心配な面があった。
- ・現行の推薦入試制度は、普通科・専門学科にかかわらずすべての学科で実施しているが、もし推薦入試制度を残すのであれば、スポーツとか文化活動で特に優れた生徒だけに限定しての推薦という形にして、普通科の推薦入試は廃止してもよいのではないかと思う。普通科で推薦入試を受検する生徒は成績優秀な生徒がほとんどであり、一般入試でも合格できる力を持っていると思う。
- ・第二次募集については、仙北では定員に満たない学校が多くあり、学校運営上厳しいことになるので、残した方がよいと思う。一般入試で残念ながら不合格になった生徒にとっては第二次募集は最後のチャンスでもある。第二次募集は仙台市内など受検生が多く集まるところは不要かと思うが、仙北の高校では必要である。
- ・4つの試案については、保護者が合否の基準をまだ余り理解できていないという面もあり、多くの保護者は現行の受検機会の3回から2回に減るということには抵抗を感じるのではないかと思う。将来的に受検機会を2回にするということであれば、個人的には段階的にB案からD案に移行するのがスムーズでないかと思う。

○ 田村 百合子 氏

- ・県立高校の推薦を頂いた長女と一般入試で入学した次女がいて、両方を経験している親の立場から話をさせていただく。
- ・推薦を頂いたときはとてもうれしかったが、保護者の間で様々な情報が飛び交い、中傷もあった。親は自分の子どもがとてもかわいく感じるものであり、親の方の感情的なトラブルがあった。
- ・学校のすべての先生方が推薦入試に対して理解しているのかという疑問がある。高校からの様々な情報を、受け取る側の中学校の先生方が全員正確に理解するのは多分不可能ではないか。また、感情とか先生方が子どもを見る相性というものもあるので、人が人を評価するというのはとても難しいと感じている。
- ・普通科では推薦入試がいらないのではないか。推薦入試に伴う保護者間の感情的なトラブルは大きい

ものであり、シンプルな入試制度にしていきたい。

- ・子どもの大学進学時、学校に推薦をお願いしたらという話をした。そのとき娘から、「人生の中で受験を経験しない、苦しい思いをしない人生を送りたくない」という言葉をいわれて、親として恥ずかしいと思ったことがあった。親心としては、子どもたちに楽な道を歩んでほしいという思いもあるが、それが本当に子どものためになるのか、と反省した。
- ・次女が一般入試で県立高校に入学したときには、親子で喜びも大きかった。親の思いと子どもの思いというのは多分違っているのではないかと、2人の娘たちを見て思った。
- ・高校3年間は、親として子どもたちを厳しい社会に出すための準備であると考えているので、余りにも過保護な方法はかえってとらない方が子どもたちのためにはよいのではないと思う。普通科については一般入試のみとし、失敗した子どもたちに対しては第二次募集という形で別の道を見つけてあげることがよいと思う。

○ 廣中 孝彦 氏

- ・推薦入試に関しては、普通科は廃止、専門学科は継続、受検制度はD案の前期選抜、後期選抜による2回の受検機会がよいと思う。平成6年度に普通科推薦入試が導入されたが、当時の趣旨や目的自体が抽象的で多方面を見過ぎたものではなかったかと思う。今回のアンケートからは、推薦の基準が不明瞭で不具合が生じているように思えるので、一度普通科に関しては廃止したらよいと思う。
- ・専門学科の推薦に関しては、高校側及び生徒の目的がはっきりしている。現行どおりでよいと思う。生徒も含めて各方面の様々な関係者をすべて丸くおさめるのは多分不可能である。はっきりと目的を持ってやるとすれば、対象を絞らないと明確な答えは出せないと思う。
- ・現在、実際に学力のある生徒は推薦入試を対象にしていないのではないかと。選抜方法に対して生徒たちも疑問を感じているのではないかと。選抜方法に対して生徒たちも疑問を感じているのではないかと。選抜方法に対して生徒たちも疑問を感じているのではないかと。
- ・普通科に関しては受検機会が2度という形になるが、生徒数が減少してきている状況を踏まえ、高校の存続の問題をきちんとクリアできるような形を模索するべきである。
- ・専門学科もその専門の大学があるが、特に普通科は大学に進学させてほしいと思っている。県立高校の役割は地元の生徒を将来も地元の高校で学びたいと思わせることが重要で、特に石巻地方は実際にそれができる地域であると思う。男女共学化になり、石巻地方の普通科における女子生徒は、選択幅が増えたような気がするが、男子生徒にとっては果たしてどうなのか。また、石巻地区の高校は例えば大学進学率に偏りはないのか。普通科はある程度進学的な意味合いを持つものと考えている。
- ・地域経済においても、できれば高校までは地元の高校に入ってもらえないかと思う。平成22年度から全県一学区になることで、多分経済的にゆとりがある優秀な生徒が仙台の高校に進学するのではないかと予想されるが、実際には環境をつくることによって地元でもやれるようにしていくことが私たちの使命ではないかと思う。
- ・各高校が自分の高校の特徴をつくるというのは当然なことである。しかし、地域における高校同士の関連を踏まえて位置づけないと、何の意味の特徴だかよくわからなくなる。例えば、専門高校であれば普通高校ともいろいろ話して、この地域におけるポジションをもっと調整してはっきりさせてほしい。優秀な生徒が地域から流出するのは生徒個人の将来のことを考えての選択でありやむを得ないことではあるが、進学したい高校がなくて他の地域に行くようなことでは困る。即問題提起してほしい。
- ・良識ある人々が地域の中で普通に生活するためには幼少のころから育てている環境、また教育という位置づけが大切である。地元の産業と結びついた専門高校の確立、そして専門高校が地場産業ともかかわるような形がとればよいと思う。

〈質疑応答要旨〉

○ 櫻井 弥生 教育委員

- ・住吉中学校の黒沼先生への質問であるが、4つの試案の中で先生が一番近いと思われる試案、肯定的な試案はどれだと解釈したらよろしいか。

○ 黒沼 俊郎 氏

- ・私の中ではすべて同じ価値であり、どれがよいとはいえない。AからC案について、特にA案の「高校が示す基準」とはどのようなものになるのかが見えない。また、前期選抜において「3教科以内の学力検査を実施可」となっているが、この3教科と後期選抜で行う5教科の捉え方が、内容も含めてこの段階では見えてこない。さらに、学力検査の内容やレベルをどのように考えているのかが見えてこない。C案で学力検査が必須となった場合、子どもたちへの負担や指導を、学校現場としてどう考えたらよいのかなど、それぞれの試案に課題があるという考えで、平行線という答えをした。

○ 菅野 仁 副委員長

- ・明確にD案を機軸に考えるべきと御発言いただいた渡邊校長への質問である。アンケートでは、受検機会の複数化に関して、保護者の7割が3回を希望しているが、中学校の進路指導主事の先生方は2回でよいとしている。この点を踏まえて、D案の場合に、2回になるということに対する保護者の感覚というのはいかがか。

○ 渡邊 幸雄 氏

- ・D案は2回だが、加えて第二次募集をすべきだと思う。定員が埋まらないというのは社会的にも非常にロスであるし、生徒にとっても保護者にとっても心配だ。最後のチャンスという部分でもある。また、中学校の先生方が2回でよいといっているのは、同じ結果になるのなら2回でよいのではないかという発想ではないかと思う。定員数も同じで、そして最終的には同じような結果になるのではないか、というような気持ちがあるのではないかと思う。

○ 小野寺 千穂子 委員

- ・石巻市PTA協議会の田村様への質問である。先ほど入試はシンプルにという御意見があった。我々大人が15歳の高校受検のときに、どういう機会を与えてやるのがベストなのか。現段階は3回やっているから3回でいいとか2回でだめだとかという発想ではなく、そこを少し離れて、15歳の子どもたちに何を大人として保障すべきなのか、この点についての御意見をお聞かせいただきたい。

○ 田村 百合子 氏

- ・数学と違って人間の感情は余計なことで惑わされることが多いような気がする。だから、一般入試という同じスタートラインを子どもたちに与え、残念なことに合格できなかった子どもに対しては、別な進路を提供してあげる、情報を提供してあげることが大人の務めではないかと思う。スタートラインがいろいろあると、間違っただけの情報も正しい情報もいろいろ飛び交って、それがうまく保護者や先生方に伝わらないという弊害が、今出てきているのではないかと思う。
- ・入試制度自体もスタートラインを一直線にすることによって、子どもたちや大人の側に明快に説明ができる。学校の先生も親と同じ意見を子どもたちに与えられる状況をつくるのが大切ではないかと経験上感じている。

○ 小畑 研二 専門委員

- ・渡邊校長先生と黒沼先生への質問である。入試制度の改善に向けて高校側の特色をさらに明確に打ち出すというような方向性が「中間まとめ」に盛り込まれている。一方、制度が変われば進路指導あるいはキャリア教育で中学校側の教師がいろいろ迫られる課題も増えたり、あるいは視点をさらに増やしたりということも必要になってくる。子どもたち一人一人の幸せを考えた場合、中学・高校それぞれがそれぞれの立場から意見を重ねていくのが非常に大事だと考えている。この入試制度の改善に向けて高校の特色をさらにアピールしていくということは一体どういうことなのか。入試制度が変わる

うとしている中で、中学校の指導場面では今後どういったことを見据えながら指導法の改善を進めていかなければならないと考えているのか。御意見を伺いたい。

○ 渡邊 幸雄 氏

- ・高校の特色を出していくことは、入試に限らず進めていかなければいけないことである。生徒から選ばれるように特色を確立し、それをわかりやすく発信していくということが大切である。特に本校は工業高校であり、中学校の先生で工業高校出身の方というのは少ないと考えられるので、とにかく先生方にも知っていただく機会を、今年新たに設けるつもりでいる。
- ・現実問題としては、本校は科別に第1志望、第2志望と募集しているが、おそらく工業であったならばどこでもいいから入りたいという生徒は結構いるはずである。ところが本当に残念ながら、科別で募集を行うので、全体としては足りないのにその科ではもう定員になってしまったというケースもある。そのあたりが痛しかゆしの部分である。
- ・入試に限らず生徒に選ばれるような学校づくりが大切であり、特徴をつくって、それを様々な機会を通じて発信していきたい。また、中学校の先生方を対象にも行っていきたいと考えている。

○ 黒沼 俊郎 氏

- ・制度や仕組みが変わるときに、中学校としては保護者の皆様にいち早く情報を正確に伝えていくことが大きな課題になる。一番早いのは、プリント類で情報を流すことである。しかし実際に保護者の方々がそれを見るかどうか。生徒が持っていったものがきちっと通じているかどうかの問題である。
- ・学年PTAの協議会とか授業参観の際に、顔を見ながら情報を伝えることもできるが、共働きという状況を考えると、実際に足を運んでいただくのもなかなか難しい。
- ・子どもたちにもはっきりわかるように伝え、保護者に正確な情報を伝えていくことが大切である。3年生の進路指導に関する取組、例えば高校の先輩の話聞く会とか高校の先生の話聞く会となると参加率がいい。そういう機会にうまく説明するチャンスが生まれてくる。学校は繰り返しそういう機会を逃さずに、入試制度の変化や学校としての指導の見通しを伝えていく。特に仕組みが変わったり、進路にかかわる大事なものは、情報を何回も発信しながら中学校は努力していかなければならない。主体は子どもなので、子どもたちへの指導も大事になっていくと思う。
- ・田村さんから話があったことだが、高校の入試制度が変わるとなったときに、確かに3年生を中心とするスタッフはいち早く情報を入手して敏感に反応するが、2年生や1年生に所属の先生方や若い先生はどうだろうか。実際に進路指導委員会や調査書等作成委員会の中で動き出したときに、より最先端でわかっているのはその場にいた先生方に限られている部分はあるかもしれない。すべての先生方が共通理解していくことは大切だと勉強になった。

○ 小野寺 征人 教育委員

- ・5人の方々が発表されたことはそれぞれ納得できることがある。今日の御意見をもう一度持ち帰り、「中間まとめ」と比べてみて、もう少し勉強をさせていただきたい。問題意識が以前よりも広まった気がする。

○ 大村 虔一 教育委員長

- ・先ほど小野寺委員から話あったように、中学校で身につけてきたことをさらに生かして高校に行くときに、どういうバトンタッチの仕方をしていくのか、どのようにつながっていくのかということはとても大切なことだ。個人差はいろいろあると思うが、それぞれの子どものイメージに合った導き方をどのようにするのか。割にませて育った子どもとか、おくてでまだ非常にプリミティブなことをやっている子どもとかいろいろ幅がある。そういう中でどのようにつないでいくのが課題である。シンプルであるというのは非常にわかりやすい反面、人々の状況がいろいろあるときにそれにどうこたえるのかについて別な手段を探さなければいけない。
- ・いわゆる試験というのは、人間として身につけなければいけないことをたくさん身につけている人が将来的に立派な人間になる、という考え方から生まれてきた仕組みではないかと思う。しかしパソコンなどが登場し身の回りにいろいろな知識やレファレンスをしようと思うとすぐ得られる社会では、何を子どもに身につけさせるのか、何を課していくのか、ということは非常に大きなテーマなのでは

ないかと感じる。新しい時代に向けてどういう選抜の在り方がいいのかを入選審委員の先生方をお願いをしているのであるが、私もじっくりともう少し勉強してみたい。

○ 菅野 仁 副委員長

- ・黒沼先生への質問である。「中間まとめ」の概要の3の(2)のウ一般入試についての4番目の項目に、「出願に際しては志望の動機が確認できるような方法を検討する。」とある。渡邊校長先生からは、これを選抜の要素に組み入れるとかなり問題が出てくるだろうとの話があった。子どもたちが高校入試で自分の持ち点で振り分けられることなく、今後の人生設計の最初の岐路に立つという位置づけの中で、志望の動機を書かせることには、なぜ自分はその高校に行くのかを少し明確にする機会としたという意図がある。施策として現実化したときの問題としては、渡邊校長先生が指摘したこともある。この点について中学校現場での受け止め方をお教えいただければと思う。

○ 黒沼 俊郎 氏

- ・推薦書は現場の教師が子どもたちの考えをもとに記載していたが、志願理由書は子どもたちが自分の意思で書くことになる。しかし、教師サイドが指導や支援に当たらざるを得ないのが現実である。そういった業務的なことだけを考えれば仕事量は余り変わらないと思う。ただし、子どもたち自身が、なぜ自分はそういうふうに進むのか、頑張るのかという理由を明確にすることは、子どもたちの負担にならない程度であれば、私の個人的な考えとしては大事だと思う。
- ・授業でもねらいというのはとても大事で、どうしてこの授業するのかというときに、我々はそこに一つ大きな柱を立てる。今までは推薦の生徒にはあり一般入試の子どもたちにはなかったが、自分で高校に入学するためにその扉を開くのであれば、理由を明確にするというのは大事である。

○ 菅野 仁 副委員長

- ・廣中様への質問である。地元の専門学科の学校ない生徒と地場産業との連携ということの御指摘の中で、専門学科を卒業したとはい、即戦力的な観点からするとちょっと弱いという話があった。専門高校の指導に何を期待し、何を要求するのか。入試制度とは少しずれるが、広い意味ではつながっていることなので伺いたい。また、地元の普通科の生徒に関しては進学という観点から御説明があった。地元で高校を出て即戦力として働く事務系が中心となるかもしれないが、その点についての期待や要求を、入試制度とは独立した形でも結構なので、伺いたい。

○ 廣中 孝彦 氏

- ・工業系、技術系の仕事をしているが、専門高校を出た子どもの方がいいのではないかと常識的には考えられるが、実際のフィット感は余りない。学校でやっている技術の学習が、自分の会社と直接結びついていないのかもしれないが、普通科を卒業した子どもと、例えば商業科を卒業した子どもとそう変わらない。社会に出ると、技術系は一からのスタートとなる。個人が基本なので、学校別で採用というほど地元ではポジションが確立していない感じがする。大学になるともっと色合いが出てくるかもしれない。
- ・中学生が地元の高校をきちんと選択できているのか疑問である。受検前の姿勢としていきたい高校に進学するのが基本である。推薦入試も、行きたい高校だから推薦を受けるというのが基本だと思うが、少しずれが生じていると思う。
- ・高校が希望する入試制度なのか、生徒が希望する入試制度なのか、1回そこをきちんと整理しないと次に進まないのではないかと。現場サイドの事務量の負担の有無とかではなく、まずその原点を先に考えていただきたい。
- ・中学校から高校に行く段階で、例えば高校側を主体にするとか、生徒を主体にするとかいうのは若干難しいのではないかと感じる。普通科の推薦入試は1回やめた方がよいと思う。

〈傍聴者からの意見要旨〉

- ・現状の推薦制度はうまくいっていない。廃止してリセットすべきではないか。
- ・審議委員の先生から、3回の受検機会の確保という親からの希望の話があったが、子どものよさをいろいろな尺度で見してほしい。現在の推薦制度では、一般入試でも合格する子どもが推薦で合格している。また、基準が明確でないので、なぜあの子が受かって、なぜこの子が受からないのか、という矛盾が校内でも生じている。
- ・現行の一般入試は調査書、学力点も含めて、子どもたちのよさを多面的に見ている。現行の入試制度をさらに保護者に説明した上で進めるのがよい。
- ・4つの試案では、高校が示す基準というのは一体何なのか全く見当がつかない。それを高校が示せるのかも次回の説明会で具体的に説明いただきたい。前期選抜で定員の50%から90%を募集するD案は、落とされる子どもたちの気持ちを考えると大変つらいものがある。また、後期選抜で生徒の特色を評価するとあるが、生徒の特色をどうやって判断するのか疑問である。4つの試案はそれぞれ問題がある。新たなE案というものがもし可能であれば次回示していただきたい。
- ・全県一学区など、入試制度だけではとどまらない問題がたくさんある。高校は地域の学校という立場であるべきだと思う。子どもたちのためによい制度をつくってほしい。
- ・2月19日に「中間まとめ」が発表され3月の半ばに仙台で意見聴取会があったが、2・3月というのは、受検生はもちろん、保護者は自分の子どものことで、中学校や高校の先生は入試事務のことで精一杯で考える余裕がなかった。仙台で意見聴取会をもう一度行ってほしい。
- ・入試制度が変わることで一番影響を受けるのは子どもたちである。例えば高校2年生に自分が今までの入試制度を受けてどうだったのかということ、「中間まとめ」をきちんと説明し、子どもたちがこの制度をどう考えているか、生の声を聞く場を設けてほしい。
- ・選抜内容が本県とほぼ同様の岡山県の普通科の募集割合は10%から20%であるが、一番倍率が高い高校で10.19倍、平均で4.77倍である。A案からC案の前期選抜で募集割合を10%から40%としているが、仮に高倍率になった場合、本当に高校の先生方がきめ細かく子どもを評価して合格、不合格を明瞭に出せるのか疑問である。また、秋田県は3倍で足切りをする制度を設けているが、この場合調査書のみで不合格にされるという問題もある。
- ・各学校ごとに裁量幅を認める割合、制度が複雑になる。全県一学区という状況で、すべての高校がどのような基準で、どのような生徒を求めているのかを中学校現場の教員がすべて把握し、それを子どもに提示して、子どもたちは自分で選ぶことが本当にできるのか疑問である。
- ・青森県では各校が求める生徒像、募集割合などを全部示している。まとめた冊子を子どもたち全員に県教委は配れるかという点、多分予算的にも難しい。子どもたちが学校を選択することが非常に難しい状況になる。シンプルな入試制度にすることは非常に大切である。
- ・専門学科に関しては推薦制度をそのまま継続してよい。普通科に関しては、以前に戻し、一般入試と第二次募集とする。保護者が受検機会3回を支持する理由は、当日病気になった場合など不安な部分があるからである。静岡県などでは、一般入試で病気、天災などで受検できなかった子どもに対して、追考査を実施している。保護者の3回、中学校の2回という要望に応える案になる。

(3) 南三陸会場

【日 時】	平成21年4月26日(日) 13:30~15:30	
【会 場】	宮城県南三陸合同庁舎3階大会議室(本吉郡南三陸町志津川字御前下51番2号)	
【出席者】	意見発表者	
	宮城県本吉響高等学校長	高橋 郁夫 氏
	南三陸町立志津川中学校教諭	小野寺幸博 氏
	気仙沼市立面瀬中学校PTA顧問	小野寺清江 氏
	本吉町スポーツ少年団指導者協議会長	菅原 英俊 氏
	NPO法人大島大好き代表	白幡 昇一 氏
	入学者選抜審議会委員	
	委員長 大桃 敏行	
	専門委員 榎木 喜一	専門委員 木島美智子
	教育委員	
	委員 櫻井 弥生	委員 小野寺征人
	教育委員会事務局	
	教育次長 千葉 裕一	教育企画室長 安住 順一
	義務教育課副参事 桂島 晃	高校教育課長 高橋 仁
	高校教育課副参事兼課長補佐 村上 靖	

〈意見発表者要旨〉

○ 高橋 郁夫 氏

- ・勤務校は本吉町にある単位制の総合学科の高校である。総合学科の特色は、多様な選択科目の中から、自分の進路や興味・関心に合わせて科目を選択し、進路実現を目指すことができる点にある。様々な体験学習などの場面をとおして、生徒に自分の進路を意識させている。
- ・学校説明会や「響通信」といった学校便りの発行などをとおして、総合学科の特色や学校の取組などの情報を中学生や保護者に発信している。
- ・総合学科の学校になって10年になる。当初は東北大学に一般入学した生徒もいたが、現在は様々な問題を抱えた生徒も入学してきている。
- ・推薦入試で入学した生徒は成績もよく、部活動にも一生懸命取り組み、模範的な学校生活を送る生徒が多い。多少学力が低くとも、本校入学の目的がはっきりとした意欲的な生徒が、推薦入試を希望してもらえればと考えている。
- ・第二次募集で入学した生徒は入学時の成績はよいものの伸び悩む傾向が見られ、不本意入学という心理的なものが払拭できていないのではないかと分析している。
- ・中学生は「入りたい学校」、「入れる学校」の二つの尺度で高校を選択していると思う。「入れる学校」という尺度での学校選択はよくないと思う。
- ・A案に賛成である。複数の受検機会を保障している点、前期選抜で高校の特色を重視し、高校側の示す出願要件で生徒が志望してくる点、B案・C案と異なり学力検査の有無を高校側で判断できる点が主な理由である。学力検査を課さない普通科、学力検査を課す専門学科があってもよいと思う。
- ・学区内の高校の校長に対してアンケートを実施した。学力検査を課しているか否かで中学校での勉強への取組が異なるのではないかとこの考えから、前期選抜においても学力検査を課したいという意見が多い。
- ・前期選抜の時期として2月初旬と示されているが、校内の卒業に向けた考査の日程とも重なるので、検討してほしい。後期選抜及び第二次募集は現行のままか、あるいは、中学校での学習できる期間をより確保するという意味で、実施時期を遅らせた方がよいと考える。

- ・D案では学習と特別活動のバランスのとれた生徒の育成が難しいと思われる。また、受検機会が1回減る問題もある。
- ・前期選抜で中学校長の推薦がなくなれば、志願理由書のみで自由に受検可能なことから、特定の学校に受検者が集中し、大量の不合格者を出すことになることが予想される。前期選抜の募集定員の割合について学校の裁量幅をもう少し大きくしてもよいと思う。
- ・志願理由書の提出については、作成に当たって中学校側の負担が増えないか、心配である。
- ・一般入試で調査書点を重視した場合、中学校ごとに調査書点の評価基準に公平性が保たれるのか、データとして客観性があるのか心配な点であり、検討願いたい。

○ 小野寺 幸博 氏

- ・中学校の教諭として、また中学生の子どもを持つ親として発表したい。
- ・A案とC案では、学力向上という県の教育課題を考えた場合、学力検査を必須としたC案がよい。本来、学習は、楽しさや面白さから学習の深化や興味関心につながるものだと思う。しかし、このような学習意欲も、ある程度の基礎学力や学習習慣・学習方法が身に付いていればこそである。家庭学習時間が0～30分という生徒が6割以上を占めるデータもあるような状況下では、推薦入試にかわる特色化選抜において学力検査を課すC案がよいと思う。
- ・B案では専門学科で推薦入試を継続するという点で、現行制度の改善になっていないことが問題である。現行の推薦入試の課題は、中学校長の推薦を得た生徒とそうでない生徒とで受検機会に差があること、中学校で具体的な校内選考基準を示せないことである。また、高校で求める生徒像や出願要件が具体的に示されていないことから、高校が求めている生徒を推薦することができないという課題もある。
- ・D案について、中学校の進路指導主事の75%が「一般入試と第二次募集の2回の受検機会がよい」と回答したアンケートの結果を受けての案ということである。このアンケート結果となった理由として、推薦入試における課題、進路事務の複雑さの問題もあると思うが、それ以上に推薦入試決定後の学習不足などの問題を踏まえての回答だと考えている。このことが宮城県の学力低下につながっていると考えている。
- ・私の所属校の職員は、前期選抜の特色化選抜で学力検査を課すのであれば、受検機会が3回の方がよいという意見が多数である。
- ・私はC案がよいと思う。特色化選抜における各高校の示す基準については、検討が必要な点である。誰が見ても明らかで具体的な基準が示されることが望ましい。
- ・調査書の形式、内容は20数年前から大きな変化はなく、ワープロ作成が可能になり事務処理が軽減されたくらいである。調査書作成で苦勞しているが、入試の可否判断の材料としてどの項目がどの程度使われているのかわからない。高校側が選抜の資料として確実に必要なものを精選する方向で、調査書の改善を図ってほしい。
- ・調査書への絶対評価の導入は、子どもたちの努力や実際の力を評価できる点からよいと思っていた。一方で、その評価基準が各中学校や先生方によって違っていることも現状である。この意味において評価の客観性や公平性が保たれているか疑問である。例えば、県内統一テストを実施し、その結果を記入するということも考えられるのではないかと思う。

○ 小野寺 清江 氏

- ・面瀬中学校のPTA会長だった立場、5人の子どもの保護者としての立場から話したい。
- ・5人の子どものうち2人が推薦入試の機会を得た。希望する高校への入学を考えても、明確な動機がない、面接が不得意、作文が書けないなどの理由があると、ある程度の成績をとっていても中学校長に推薦を願い出るとは難しいものである。推薦希望の有無を問われても、このようなことから推薦されない生徒がいると思う。何を基準にして、推薦できるのか、あるいはできないのかわかりづらい。
- ・一般入試は将来の希望が明確ではない子どもにとって、よい制度だと思う。
- ・職場の仲間に推薦入試について聞いたところ「あった方がよい」という意見が大半だった。しかし、中学校間の学力差や、校内の推薦基準の違いなどの問題点も多いと考えている。
- ・アンケートに基づいて答えると次のとおり。Q1（一般入試の学力検査問題の構成）：ア（現状の質・

- 量でよい)。Q2 (1教科当たりの検査時間):ア (50分)。Q3 (学校選択問題):ウ (改善すべき)。
 Q4 (相關図):イ (改善すべき)。Q4-2 (改善の方向性):ア (学校裁量幅をもたせる)。Q5 (推薦入試):イ (メリットもあるがメリットの方が大きい)。Q6 (普通科の推薦入学者の割合):ア (現行の30%以内が適当)。Q7 (専門学科・総合学科の推薦入学者の割合):ア (現行の40%以内が適当)。Q8 (体育科・美術科の推薦入学者の割合):イ (30%程度まで減らすべき)。Q9 (推薦入試の選考資料):学力検査を施行すべき、例えば3教科がよいと考えている。Q10 (推薦入試):ウ (改善すべき)。Q10-2 (理由):エ (基準が不明瞭)とク (学力向上の障害)。Q10-3 (改善の方向性):ウ (学力検査を加える)のみ。Q-11 (第二次募集):ア (継続すべき)。Q12 (第二次募集の選抜資料):エ (調査書+面接+学力検査)。Q13 (調査書):ア (現状を継続すべき)。Q14 (評定の活用):ア (1~3学年分 (現行))。Q15 (受検機会):ア (現行のままで3回が適当)。Q16 (1回目の実施時期):イ (2月上旬)。Q16-2 (2回目の実施時期):ア (3月上旬 (現行))。Q16-3 (三回目の実施時期):ア (3月17日から20日 (現行))よりもちょっと早目に。
- ・私の意見を全体的にまとめると、現状の一般入試についてはほぼ現状のままでよいと思う。推薦入試はデメリットもあるが、メリットの方が大きいと考えている。
 - ・C案をベースに、各学校の募集定員の割合を30%以内の推薦がよいと考える。全学科において推薦入試を行い、推薦を受けた者は受検機会が最大3回になることがよい。この場合は推薦基準を各学校において明確に示し、学力検査も課すことを希望する。
 - ・各選抜の時期は1回目が2月上旬、2回目が3月上旬、3回目は現行より少し早目がよい。

○ 菅原 英俊 氏

- ・スポーツ少年団協議会の会長として長年子どもたちとかかわってきた経験、また、学力という観点よりも、子どもたちをどう伸ばすか、育てるかということを踏まえて意見を述べたい。
- ・示された4つの試案に対して結論的なことはなかなかないのが率直なところである。
- ・20年前の子どもたちよりも指示待ちの子どもが多くなってきている。サッカーでは自分でアイデアを出してプレーすることで面白みが出てくるが、それができない。このような訓練を家庭や学校で行う必要性を感じる。
- ・入試改革を考える時に地域性も考慮する必要があるだろう。県選抜チームを見た時に、仙塩地区の子どもはすぐに指導者の周りに集まるが、県北の子どもはそれができない。少し環境がかわっただけで自分の能力を発揮できない。どこにいても自己主張、能力が発揮できる育て方の必要性を感じる。
- ・指導者も人間という一つの「個」を育てる能力が必要だ。技術の指導能力は上がっているが、「個」を育てることができない指導者が増えている。
- ・小学校は何をやりたいのか幅広く経験させる時期、中学校はある程度進路の方向性を選択して絞り込む時期、高校では個々の能力を熟成させる時期だと考える。高校入試前の中学校3年間は学習、スポーツ両面で大事な時期である。中学校の段階で高校卒業後を見据えた進路指導が大切だろう。
- ・地域の人たちは、地元の高校の特徴をよく理解していないと思われる。入試近くになり、この学校には、このような特徴があり、このような入試を行っていると知っても遅い。PTA会報にしても会員向けの部分を中心となっている。TBCの『ウォッチン!みやぎ』で高校の特色ある活動を紹介しているが、このような広報が非常に大事だと思う。地元の高校が地元の方々に活動をもっと紹介した方がよい。
- ・栗原で仕事をしているが、一迫商業高校の話題が多く出る。地元紙に弁当やお菓子の開発などで地元企業とタイアップしたことが取り上げられている。また鶯沢工業高校の技術なども紹介されている。入試改革する上でこのような情報発信の取組を是非お願いしたい。
- ・推薦入試については余りよく思っていない。中学校における推薦基準がよくわからない。推薦は成績の優秀な子どもが、いわゆるよい高校に推薦してもらえるものという意識が強かったが、現状はそうでない。このような推薦入試ならやめた方がよい。
- ・中学3年の夏から頑張り一般入試で高校に合格した生徒がいた。サッカーをやりたいという目的でレベルの高い高校に合格した。何かきっかけがあれば自分の目標を達成できる能力を子どもは持っているのので、高校入試段階での推薦の必要性は余り感じない。
- ・専門学科は普通科と違う意味合いを持つので、ある程度の裁量は必要かと思う。

- ・私の考えに近いのはC案である。推薦入試は基本的にいらぬ。A案・B案については、学校裁量の部分もあるが、実質推薦入試を残すことになりかねない。
- ・D案については一般入試を2回に分ける意味がよく理解できない。しかも前期選抜が5科目、後期選抜が3科目と生徒の特色を評価することを、合否判断に入れるという。なぜ一般入試なのに、前期選抜と後期選抜に差をつけるのか。また、後期選抜で、特色を評価するのなら前期選抜においても選考に含めるべきだ。
- ・全県一学区の移行に伴い、入試制度とどう関連するのか興味ある話が新聞に掲載されていた。その記事では地域格差の可能性が示されていた。自分の行きたい高校が地元ではなく、中央ということになれば、入試の問題だけではなく学校経営にも大きな影響が出てくると思う。また、親の経済的な負担、子どもの精神的な負担も増えると思う。
- ・もう一点は中高一貫教育が今回の入試改革とどう関連するのか興味をもっている。来春開校する仙台二華高校は志望者が多くなりそうだという話題も聞いている。また、地元の志津川高校と連携中学校との関係はどうなっているのかもお聞きしたい。

○ 白幡 昇一 氏

- ・私が所属するのは地域作りの団体であり、教育とは少し違った立場から話をしたい。
- ・私も42年前に高校入試を受験したことを思い出した。自分の時を思い出すと「みちのく学習会」という模擬テストで、自分がどのポジションにいるのかを把握できた。当然、学校での中間考査や期末考査の点数も廊下に張り出された。高校や大学の合格者も名前まで載った。
- ・2番目の娘の入試の次年度から高校の推薦入試が始まったように記憶している。そのころはある程度学校で成績が上位の子どもが推薦されていたように思う。
- ・子どもに「推薦入試はどうなんだ。チャンスが何回もあって一般入試よりいいのでは。」という話をしたところ、「今の推薦入試は面接や作文があり、その練習が学校の勉強よりも多い。」という話を聞いた。したがって、推薦入試で不合格になると、一般入試に対応する学力を身に付けて合格しようと思っても実力が及ばないこともありうるし、決して推薦入試はチャンスが増えるというよい話ばかりではないということだと思う。
- ・当然推薦入試でも学力検査が課されていると思っていた。しかし、現状は面接・作文等にウェイトが置かれていること、また、受検機会の公平性を欠くという意味でも、現行の推薦入試に疑問を感じる。
- ・子どもたちの高校入試は、一生を決める大切な選択になる。専門学科に進んでから、やはり別な道に進みたいと思っても、中退をして普通高校に行くことは難しい。このように、将来を考える上で入試は大きな意味を持つ。
- ・入試のハードルは極力低くして、かわりに卒業のハードルをちょっとだけ高くすることで、高校3年間は勉強しなければならないシステムを作れないものかと考えている。
- ・大島で資源循環の仕組みを作るNPOを始めて5年となる。そこで多くの教育旅行の子どもと接する。今の子どもは言語は同じだが、ちょっと人種が違うような印象を受ける。勉強という知識は大事なものであるが、その知識を有効に活用した知恵が大事である。本物の生活体験に触れさせ生きる知恵を身に付けさせたい。
- ・全県一学区になった場合、子どもが集中する学校、集まらない学校の差が生まれると思う。現実的に東京の公立高校では閉鎖に追い込まれた学校もあるとも聞いている。学校が選ばれるようになっていくのは、いかがなものかとも思う。
- ・自分としては示された4つの試案についてはそれぞれの特徴を生かす形で考えられており、特にこの案がよいという考えがあるわけではない。

〈質疑応答要旨〉

○ 櫻井 弥生 教育委員

- ・小野寺清江さんは中間まとめのアンケートに沿って番号で説明された。フロアの方すべてがアンケートを持っているわけではないので、皆さんで意見を共有するためにも、推薦の基準をはっきりさせること、学力検査が必要であること、C案をベースにして定員の30%以内の推薦ということは理解しているが、小野寺清江さんに現行入試と異なる点を中心にピックアップして改めて説明をお願いしたい。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・小委員会ではアンケート調査を行ったが、お手元の『県立学校入試制度改革試案のポイント』のC案を踏まえて説明補足をお願いしたい。

○ 小野寺 清江 氏

- ・現在の推薦入試をゼロにすることは考えていない。前期選抜においては3教科の学力検査を必須とする。普通科、専門学科両者ともに前期選抜の募集定員の割合は30%以内とする。全学科とも推薦入試を実施し、推薦された場合、受検機会は最大3回とする。これが親としての立場として一番よい方法だと私は考えている。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・『県立学校入試制度改革試案のポイント』を基に意見交換をしていきたい。現行の制度は、1月末の推薦入試、3月上旬の一般入試、3月下旬の第二次募集の3回の入試から構成されている。審議会が示した4つの試案について、現段階では順位付けを行っているわけではない。頂いた意見を参考に、いろいろ手を加えて改定していきたい。
- ・A案とB案はかなり似ているが、一番の違いは専門学科において推薦入試を残しているのがB案である。前期選抜のところでは各高校判断で3教科以内の学力検査を課することができる。
- ・A・B案とC案の違いは、C案では3教科の学力検査を必須とすることであり、推薦入試は行わない。
- ・小野寺清江さんの意見は基本的にC案であるが、普通科、専門学科ともに推薦入試を残し、その定員は30%以内に抑え、受検機ையை3回とするということである。
- ・D案は前期選抜と後期選抜とも学力検査を実施し、推薦入試は廃止する。前期選抜の定員は50～90%であり検討しなければいけないが、仮に90%とすると大学入試の前期日程・後期日程に非常に近い。
- ・本吉響高校の高橋校長は基本的にA案、志津川中学校の小野寺幸博先生はC案、小野寺清江さんはC案プラスαで推薦は残した方がよい、4番目の菅原さんはどちらかというとC案に近い、それから白幡さんは特にどれということはないが、推薦入試には問題がある、ということである。これを踏まえ、他に質問はないか。

○ 小野寺 征人 教育委員

- ・前回の石巻会場とも違った意見が聞けた。これから他地区でも意見聴取会を開催が予定されているし、また、パブリックコメントも実施予定であるので、多くの意見を参考にしてもう少し幅広く検討しなければならないと感じた。
- ・高橋校長先生に伺いたい。支持するA案の特徴は特色化選抜であり、A案の大きなポイントは高校が示す基準に合致した者が出願可能であるという点にある。学校の裁量権の拡大という点から大事な視点だと思うが、中学生が理解できるように具体的に基準を示せるのだろうか。例えば、調査書の評定平均値4.0以上と基準を示す学校も出るのではないかと、むしろ高校はそういう基準を示したいのではないかと、思うのだが、いかがか。

○ 高橋 郁夫 氏

- ・現在は「成績が良好であり、高校入学後の勉強する目的がはっきりしている」など大体同じような内容でしか示すことができない。また、中学生に対して数字は具体的に示すことはできない。今回の改善で成績を示すことができるようになれば、より具体的に出願基準が示せると思う。
- ・現在、本校では1日体験入学を開催し、実際の授業を幾つかの種類から選んで体験してもらうなどの取

組をしている。このような努力を各高校が行うことは大切であると思う。実際に推薦入試で入学した生徒はとても伸びるので、多少成績はよくなくてもやる気があって、本校の総合学科を理解して、こういう学校に進みたいという目標がある生徒に入学してもらいたい。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・各高等学校で特色を出し、中学生が自分の希望に合う学校を選ぶのが一つの理想型だとは思いますが、総合学科や専門学科は特色ということがいると思うが、普通科では特色を示す難しさがあるのではないかと。
- ・小野寺幸博先生に質問であるが、特色化選抜との関連で、志願理由書の提出を求めた場合、中学校側の負担は大きくないか、その点はいかがか。

○ 小野寺 幸博 氏

- ・推薦入試にとどまらず、前期選抜、後期選抜の出願書類の一つとしての志願理由書、あるいは試験中に作文が課された時ということか。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・いずれの選抜においても志願理由書が課された場合は、先生方はいろいろな形で指導を行うのではないかと。

○ 小野寺 幸博 氏

- ・出願時に提出が求められるのであれば、子どもたちがよい志願理由書を書けるように中学校の先生は一生懸命取り組むと思う。志願理由書が100%必要となれば、当然頑張る先生がいると思うし、それが試験当日の作文であっても同様である。今も推薦入試で指導しているが、生徒に対して指導を行わない場合、最初の段階でよい作文等ができあがるのは現状として難しいと思う。

○ 菅原 英俊 氏

- ・前期選抜での志願理由書の提出と後期選抜での志願動機の明確化とはどのような点で違うのか教えてほしい。

○ 高橋 仁 高校教育課長

- ・志願理由書については審議会でもまだ明確になっているものではない。前期選抜における特色化選抜では志願理由書という形で明確に示した方がよいと思いき、このような文言になった。しかし、後期選抜では志願理由書の提出までは求められないことも考えられたので、入試が中学、高校、社会をつなぐという観点に立ち、中学時代に少しでも高校入学後のことを考えてもらいたいという主旨での表現となっている。
- ・志願理由書を選抜資料とするかどうかは審議会でも意見を伺ってきた。これまでの意見聴取会でも、選抜資料にしないのならば、中学校の先生が時間を費やし指導してまで書く必要があるのかという意見も頂いている。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・志願理由書を書くことで中学生が将来について考えることになるが、それを入試の基準に入れるかどうかは議論するところである。中学校の先生が多大な時間を費やすということもある。
- ・推薦入試は公平性の問題、選抜基準の問題等で議論があった。小野寺清江さんからC案を原則とし、推薦入試を残す意見であった。推薦入試が導入されたのは導入されるだけの理由があったからと思うが、この点について、小野寺清江さんの御意見をお聞きしたい。

○ 小野寺 清江 氏

- ・推薦入試には推薦入試のよいところがある。子どもの一人は千葉県の中高一貫校に推薦で入り、薬科大まで進学したが、子どものよい部分を推薦入試で評価してもらった。もう一人は地元の高校だが、どちらかというと引っ込み思案の子どもであり、作文も人前での話も苦手なことから推薦の対象とはならないと考えた。推薦入試には推薦入試のよいところがあり、一般入試には一般入試のよいところがある。一般入試で入った子どもは最後まで頑張る力を持っていると思う。
- ・急に推薦制度を廃止したら、中学校・高校ともに大きな問題が生じると思う。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・中学生も多様で、自分のよいところの出し方が様々であり、入試の仕組みもそれぞれの子どもに合う合わないことがあるということだと思う。

○ 榎木 喜一 専門委員

- ・小野寺幸博先生に質問であるが、中学校の現場ではどのように推薦の基準を決めているのか伺いたい。

○ 小野寺 幸博 氏

- ・校長先生によっても考えが違う。学校によっては、校内で基準を設けて、学習を頑張った者や部活動を頑張った者などを推薦に値する生徒と判断し推薦することもあるし、また、学校側から推薦可能ということもあるし、子どもや家庭からの希望で推薦することもあると思う。
- ・推薦基準は、中学校によりある程度幅はあると思う。仮にその基準に満たないことで推薦を得られなかった生徒が、実は高校の推薦基準を満たしていることもあるかもしれない。そういうことが考えられるので、生徒の受検機会を奪ってはいないだろうかと思う。校長や進路指導主事を含めた担当の教員は、高校側の推薦基準がもっとはっきりしていればよいと思っている。はっきりとした推薦基準が示せないのであれば、中学校の現場を悩ませるような推薦入試は廃止してほしい。
- ・自分自身としては高校が示す基準を満たしていれば出願できる、自己推薦という形がよいのではないかと考える。

○ 木島美智子 専門委員

- ・「入れる学校」ではなく「入りたい学校」という志望動機を大切にしたい。特に推薦では志望動機から強い意志、どのように高校で頑張りたいのかをみたい。
- ・高橋校長先生に質問であるが、先生から高校の特色を具体的に示していくことの難しさの話があったが、保護者や生徒も基準がないと判断が難しいと考えるが、この点についてはいかがか。

○ 高橋 郁夫 氏

- ・具体的に基準を示すとなれば、部活動では、東北大会進出とか、県大会ベスト8以上。資格では英語検定、漢字検定、コンピュータの資格など。また、やはり勉強と部活をどれくらい頑張ったか、成績も具体的に示せばよい。

〈傍聴者からの意見要旨〉

- ・菅原さんが全県一学区制と入試改革の関連、中高一貫校と入試改革の関連を質問もされていた。この南三陸町で行われている中高一貫教育の入試は内申書と作文、面接である。私は5教科の学力検査も課すべきと思う。また、3教科とは何を意味しているのか聞きたい。
- ・昨日東京の方で教育に関するシンポジウムと講演会があった。藤田英典国際基督教大学教授が、「子どもと夢と誇りを大切にしない教育は必ず失敗する」と述べていた。これは何回も入試をすると、落とされてきた子どもが最後に第二次募集で入学しても、その時にはこの子どもたちは夢も誇りも砕かれていると思う。
- ・試案の中で考えると、特に前期選抜では、「入りたい」という子ども全員を対象にするわけだが、大人が持っている価値観、高校が持っている価値観を基準にして、ごく少数のわずかな子どもだけが合格をするという制度だと思う。このA案からC案のような前期選抜で限定された入試をするということは、子どもの夢と誇りを大切にしていない案と考える。
- ・京都産業大学の益川先生が、「大学入試の制度を理解している人がいるのだろうか」ということを話していた。「できるだけ仕組みの簡単な入試の方がいい」という話だ。各高校ごとに基準が異なると、全県一学区になった場合、全部の学校を私たち教員が理解して、子どもたちに情報として提供することが必要になる。実際、子どもたちが本当に自分に合った高校を選ぶことができるのかというと、非常に難しいと思う。

○ 高橋 仁 高校教育課長よりの回答要旨

- ・来春から全県一学区が導入されても、入試は現行の制度のままで行われる。先ほど心配のあった地域間格差ができるだけ生じないように、地元の子どもさんを地元の高校でしっかりと教育できるように、それぞれ学校の情報を地元にこれまで以上に発信をしていきたい。また、夏に気仙沼会場で合同相談会を開催し、高校の情報を直接中学生、保護者、中学校の先生方にお伝えできる機会を設ける予定である。
- ・中高一貫教育と中高一貫校と高校入試の関連性では、来春、第二女子高校を改編し新しく併設型の仙台二華中学校・高等学校が開校する。昨年の説明会においても多くの方が参加している状況なので、かなり高い関心を持たれていると思う。古川黎明中学校・高等学校も、既に開校しており、今後円滑に中高一貫教育校がスタートするように努力したい。
- ・この地区での連携型の中高一貫教育、志津川高校と近隣の三つの中学校で行っている入試については、推薦入試とも少し違う連携型入試を行っている。この地区での中高一貫教育については、中学生・高校生が一緒になって様々な活動に取り組んで成果を上げていると考えている。学力の面でも、さらに向上させる方策を中学校・高校が一緒になって今議論をしているところである。

(4) 大崎会場

【日 時】平成21年5月10日(日) 13:30~15:30

【会 場】宮城県大崎合同庁舎1階大会議室

【出席者】意見発表者

栗原市立金成中学校 校長	高橋 憲夫氏
宮城県古川高等学校 教諭	加賀谷 亮氏
大崎市PTA連絡協議会 会長	峯岸 賢一氏
地域若者サポートステーション	
みやぎ北若者サポートステーション 所長	馬場 義竜氏
農業経営者	石川 和彦氏
入学者選抜審議会委員	
副委員長 菅野 仁	委員 西野 美佐子
委員 堀越 清治	委員 齋藤 公子
教育委員	
委員 佐々木 悦子	委員 勅使瓦 正樹
教育委員会事務局	
教育監 菅原 通悦	教育企画室室長補佐 鈴木 隆博
義務教育課長 竹田 幸正	高校教育課長 高橋 仁
高校教育課副参事兼課長補佐 村上 靖	
高校教育課課長補佐 佐藤 靖彦	

〈意見発表要旨〉

○ 高橋 憲夫 氏

- ・将来何をしたらいいのか決定していない中学生が多くいる現状がある。
- ・自分自身の目標が設定されていないため、普通科を選択して、その3年間の中で自分自身の目標を定めていこうという考え方が強いように思われる。
- ・昔と違い、今は保護者がどういう仕事に携わっているかを、子どもたちは近くで見ることがなかなかできない。
- ・「今後の県立高等学校の入学者選抜の在り方について」の基本的な考え方の中に、「中学校や高等学校の教育を円滑に繋ぐものとすべきである」と示されているが、この基本的な考え方に賛同できる。
- ・中高一貫教育の流れが見える現状を踏まれば、義務教育を受け高校が何をするのか明確にする必要があると思う。各高校においてその教育の特色を明示して、入試に対する明確な考えを打ち出すことは当然だと思う。
- ・推薦入試制度については、廃止の方向が妥当であると考え。C案に近い考えである。各高校が求める生徒像等を明確に募集要項に示すことについて賛成である。また、推薦入試を廃止する方向に賛成なのは、推薦入試の合格者にとって、合格が一つのゴールとして考えてしまう傾向があるからである。
- ・調査書の活用についても、高校側から明確な基準を示してほしい。
- ・面接の基準も明確にし、保護者等に提示をする必要がある。
- ・一般入試については、示された改善の方向で構わないと思う。ただし、各高校で求める生徒像があるとなれば、明示すべきだろう。調査書について、現在5段階になっている評定の幅も検討すべきである。
- ・3回の受検機会を確保した入試制度になっているが、一般入試の日程が、少しずつ前倒しになってきている。中学校における3年間の授業時数を確保できない学校が多々ある。3年生のレベルを確実に習得した段階で卒業させていくことを考えれば、一般入試の期日も検討の余地があるのではないかと思う。
- ・実技教科について、どの程度力を入れればよいのかという疑問が子どもたちの中にあるので、すべての

教科における努力を認めてやれるような入試システムを今後検討していく必要があると思う。

- ・学校を選択する段階において子どもたち自身は多くの情報を持っているともいるが、その情報を的確に使えるような募集方法や、各高校の選抜に対する考え方を明確に示すことが、一番大事な点だと思う。

○ 加賀谷 亮 氏

- ・高校の教務部にいる者の立場として、直接入試の担当の部署に長年携わってきたということを含めて発表したいと思う。
- ・全県一学区への移行に対する教員の意識が非常に大きい。選択幅の拡大に伴い、高校においても、ある意味生き残りをかけた危機感を現場は今持っている状況にある。
- ・中学生には、自らの将来を十分考えた上で入りたい高校を選択できるように自立、目的意識、あるいは主体的に選ばせる能力を身につけさせ、キャリア教育的に見させる必要があると思う。当然高校は、中学生や保護者に対して、高校の特色等を明確に示していく必要がある。
- ・現行の入学者選抜制度で幾つか課題が出ているが、高校側の求める生徒像が、非常に抽象的で多様に受け止められがちだという指摘がある。高校の思いと中学校の見方が一致していないことに課題がある。
- ・推薦入試に合格した生徒の指導が難しいという中学校からの指摘があるが、高校としても中学校卒業まで何らかの学習に対する手だても必要になってくると思う。
- ・調査書活用の透明化がよく話題に上がるが、その場合、高校の選考基準をどこまで公表すべきかという一つのガイドラインが必要になると思う。
- ・一般入試の学校選択問題について、今までやってきたことは間違っていなかったと考えている。
- ・志望の動機や理由を問うことについて、どういう気持ちを持って高校を志望しているのかを、受検生を受け入れる高校としては当然知りたいと思う。その場合、明示した選抜方針がどの程度必要で、どの程度それが生かされるのかを高校としても知りたい。
- ・調査書は、基本的には、すべての項目について、選抜の中で活用をしている。(A)評定について中学校の方でどういう選考基準で選ばれているのか気になる。
- ・私としては、B案が現実的な案かと考えている。それに近いC案もよいと思うが、少し心配な点は、募集定員の割合である。試算では、募集定員の割合が現在よりも低いので、進学校を中心に高倍率になる可能性があると思えるからである。D案については、現実的な案かどうかは別にして私はある意味ではとても画期的な案だと思う。
- ・キーワードとしては、大きく二つあると思う。高校側からすれば、「学校裁量権」の拡大ということ。中学校側からすれば、「生徒に主体的に選ばせる能力を育ませること」。この二つのキーワードが、入学者選抜制度を決めていく上でのベースになっていくのではないかと思う。

○ 峯岸 賢一 氏

- ・今日はPTA代表というよりは、中学生の娘、息子がいるので、子どもを持つ親として発言させていただきたい。
- ・目的意識が明確でない生徒、学習意欲に欠ける生徒、人間関係をつくるのが苦手な生徒、そういった子どもたちが今は多くいると思う。
- ・推薦制度は、非常に難しくわかりにくいものだと思う。娘が、「結局、点数をとらないと高校には入れないのか」とも話していた。また、「推薦入学はどう思う」と娘に問いかけたら、娘は「推薦入試は楽な入試方法の一つだから、推薦はなくならないでほしい」と答えた。
- ・推薦入試は、選抜基準が抽象的で多様に捉えられることと、受検機会の差、そして、推薦合格者の割合が高く、それ以外の生徒の高校受検へ向けての学習の取組などに影響が出ており、様々な問題が見えてきていると思う。
- ・入学者選抜制度に対して、学校側の考えと、子どもたちの考え方に大きい温度差があるのも事実だと思う。
- ・希望する受検生に対して受検機会を与えたり、専門的に学びたい子どもが入りたい学校を積極的に選択し、複数の受検機会を設定するという改善については、是非実現してほしい。

- ・それぞれの高校の選抜基準を明確にしてもらい、中学校ではその保護者、中学校が事前に選抜基準を理解した上で、入学者選抜に臨むことができるようにすることは望ましいと思う。生徒自らが多様な能力、適性を生かして志望校に積極的にチャレンジできる仕組みが必要である。
- ・思考力や問題解決力、表現力なども幅広く評価できるようなシステムも必要である。
- ・今回の4つの試案の中では、B案かC案に賛成である。専門学科に進みたい子ども、専門的に学びたい子どもがいれば、特に積極的に選択して、どこの学校にも行ける方法を示してやるということは非常に大事だと思う。
- ・入学者選抜制度の改善について、受検者一人一人の多様な能力、適性、意欲、関心を的確に評価し、その力を伸ばすことができる制度となるよう、また、高校が主体性を発揮し、特色ある選抜を実施する制度となるよう取り組んでもらい、宮城県の子どもたちがこれからの未来に進めるよう具体的な改善策を講じてほしい。

○ 馬場 義竜 氏

- ・厚生労働省の事業で、若年無業者、40歳ぐらいまで仕事についていない若者の相談を中心とした就労支援の機関に勤務している。現在、宮城県で1万3千人ぐらいが若年無業者といわれている。全国でも62万人という数なので、相当数が仕事に就けないでいる状態である。社会が変わっていく中で、社会に出たときの状況が違っていたり、仕事が細分化され、選択肢が多過ぎて、仕事を選ぶのが難しくなってきた現状があるのではないかと思っている。
- ・ニートの状態になっている人たちの中で、精神疾患を抱えている人が約3割、障害をもつ人が約3割、合わせて約6割いる。残りの約4割の人たちは、自分が本当にどういう仕事に向いているのか、将来どうしたらいいのかということに本当に悩んでいて、将来の仕事を決めきれないで社会に出ないでいるという状態なのだと思う。ハローワークで就職活動をしている人たちも、自分の将来を見据えた就職活動になっていないため、なかなか就職が決まらない。そういう人たちに対して、時間をかけてキャリア相談したり、人間関係の苦手な人たちも多いので、コミュニケーションセミナーや実際の職場で体験をすることにも取り組んでいる。
- ・今はキャリア教育といわれているが、中学校、高校のときに、働く意義や、仕事とは何かや、何のために仕事をするのか、社会がどうなっているか、そういうことを学ぶ場が、現在は、教育の場でも必要だと感じている。
- ・全県一学区になることで、選択肢として多くの高校から選べると思うので、推薦入試はとりわけ普通科では必要ないと思う。ただし、専門的なことを学びたいという自主的、主体的な気持ちを応援するのは必要だと思う。そういう意味では専門学科に関しては、推薦があった方がよいと感じている。
- ・学力だけで測れないところを評価してもらおうというのは、私自身は助かった経験があり、そういう意味では学力だけでない評価の部分も少し膨らませて、続けてほしいと思う。
- ・前期選抜で特色化選抜になり、高校側が出す出願要件に合致する者で、希望者が志願理由書を提出するとあるが、高校側が示す出願要件が抽象的でよくわからないということが指摘されているので、そこは具体的に明示してほしい。
- ・志願理由書について、何を書くと、どのように評価されるのか、何がポイントになるのか等、さらに聞きたいと思う。

○ 石川 和彦氏

- ・農業経営つまり産業面からと、親として、またはPTA会長として話をしたいと思う。
- ・自分の息子が将来の目標を持って高校に入学したことは、我が子ながらすごいなと思い、素直に褒めた。
- ・頑張って勉強して入学したという経験がないからといって、将来何か壁にぶつかったときにどうのこうのとは一概にはいえないと思う。しっかりと目標を持って取り組んでいれば、応援したいと思う。
- ・娘は将来何をやりたいかという明確な目標がないため、高校を一般入試で受検した。しかし、推薦入試で合格すれば楽という考えを持つ親もいることは事実で、とりあえず推薦を出してみればという風潮もあるのではないと思う。段階的にB案から、どちらかというC案を実施し、最終的には推薦入試を廃止した方がよいと思う。

- ・ 5年前会社を辞めて農業を専業としている。しかし、農業の担い手がない、後継者がいないという大きな問題があるが、本気で農業を目指そうという子どもたちのために推薦入試制度が必要であるとは考えていない。会社員でいたことは、組織の在り方や様々な考え方を学び、貴重な経験であった。例えば、クレーム処理のときの接し方やマナーなど、農業、米づくりだけをやっていただけでは当然わからなかった部分があり、トータル的には、米づくりには生きていっていると考えている。
- ・ 専業農家でやっている仲間の中に、会社のノウハウや知識を持った人が入ると、いろんなところが見えるはずである。また、専業で大規模でやっている農家の先輩とか仲間からやり方を教えてもらい、お互いによい関係である。ある意味今まで専業でやっていなかったもので、大きな失敗とか怖さを知らないためか、逆に思い切ったことができることもあると思う。
- ・ 推薦されて専門学科の高校に入るということは、必要ない。将来的に何をやるかを見つけるまでは、時間がかかるかもしれないが、それに対して頑張っただけで何とか達成するんだという強い意志をあえて子どもたちに与えてやらないといけな。子どもを余り過保護にしない方がよいと思う。

〈質疑応答要旨〉

○ 西野 美佐子 委員

- ・ 高橋先生・加賀谷先生への質問であるが、余り時間をかけずに作成でき、活用しやすい調査書には、どのような項目を盛り込めばよいのか。つまり、調査書をどのくらい活用して高校教育をしているのかと、生徒の活動内容をすべて盛り込めるような書式になっているかをお聞きしたい。
- ・ 峯岸さんへの質問であるが、専門的な勉強をさらに続けたいとした場合にどこにでも行けるようにすべきとあったが、選抜基準として思考力や問題解決能力を測定するような入試とはどのようなものと考えているのかをお聞きしたい。
- ・ 馬場さんへの質問であるが、入試の問題の内容に関して、将来に生かす、あるいは高校側の求める学力を測定できるような入試にするとしたら、どんな内容に、どこを改善したらよいと思うのか、御意見を頂きたい。

○ 高橋 憲夫 氏

- ・ 調査書については、子どもたちのよさを十分に表現してやりたいと考えている。記入をしなくてもよいと思う部分も、学校としては思い入れが強いので、記載することが多い。
- ・ 5段階評価は絶対評価なので、あるレベルに達成していれば、素晴らしいものについては状況に関係なく5がつく。5から順番に5、4、3と段階として評価がつくのだが、この段階を細かくすれば、子どもたち自身の力をより細かく判断できるし、中学校3年間の生活の様子を、生徒がどれだけ頑張ったかをより的確に評価できると思う。
- ・ ㊤ 評価については、割合が決まっていて非常に厳しい部分がある。その割合を外すか、または、そのことについて記載をする部分のスペースをつくり、ランクをつけて子どもたちの素晴らしいところを記載したいと思う。保護者や生徒と話し合える人間関係をつくっていくことは、大事である。
- ・ ㊤ 評価の評価について高校でさらに考えてほしい。スポーツ面においては、県レベルの大会に参加して、上位入賞をした者については記載するという項目もあるが、子どもたちのことをできるだけ多く調査書に記入できる部分がさらにあればよいと思う。余計な部分は記載しなくてもよいことも明確であれば、その部分を省いて、必要な部分で子どもたちのよさを示してやりたいと思う。調査書については多くの改善部分があると思う。

○ 加賀谷 亮 氏

- ・ 調査書はA3判1枚の大きさである。その中に、中学校の学習状況、生活の様子、部活動、委員会、欠席日数、総合的な学習の時間とか、様々なことが記載してある。高校は、その内容について、すべて読んでいる。宮城県の調査書は、他県に比べると内容がたくさんあり、とても丁寧につくられているので、記載する中学校の先生の御苦勞は、はかり知れないものがあると思う。
- ・ 調査書の内容を「高校の方でどのくらい読んでいるのか」とか、「本当に活用しているのか」という声

については、入学してからも、その調査書を担任の先生がもう1回読み返して活用するなど、いろいろな面で使わせていただいている。

- ・5段階評価の評定は、高校としては頂いた数字をそのまま評価するしか方法がないので、その段階をもう少し細かくするとかという議論は当然出てきてよいと思う。
- ・記載のスペースについては、それほど書かなくてもよい部分にたくさん時間を要したり、字数を要したり、いっぱい書きたいところにスペースが足りなかったりとか、バランスが確かに悪いと感じている。記載されている内容を選抜の資料として活用している。

○ 峯岸 賢一 氏

- ・推薦入試においては、全県一学区になり、子どもたちも専門の分野の高校に進学しやすい状況にはなると思う。専門的な分野に進む場合は、受検生に対する面接などがあってもよいと思う。
- ・中学校における人物評価を、複数の先生が記載するなど、もう少し詳しいものにする方法もあるのかとも思う。

○ 馬場 義竜 氏

- ・入試の内容にキャリア的なことを入れるのは、難しいことだと思う。
- ・調査の中で、調査書と学力検査の割合について幅を持たせるという項目があるが、9対1か1対9とか、調査書と学力検査の割合を設定することが学校の裁量でできれば、学校がほしい人材や、学力だけではない特色がある人材が合格しやすくなると思う。

○ 堀越 清治 委員

- ・子どもたちがいかに目標を持ってその将来を見通せるのかという意味でのキャリア教育は、今後大切になると思う。進路選択のための材料は多くあるが、子どもも保護者も決定できない状況がある。より専門的に何を示すのかを示すことが今後大事な観点となると思う。
- ・加賀谷先生も中高を繋ぐことが大切だという意見だが、中学校の進路指導がよくわからないということから、中高の繋ぎというものが、この入試の改善の中で大きな要素であると思う。中学校が何を子どもたちの頑張りとして伝え、高校でその何を見るのかが問われていると思う。
- ・高橋先生への質問であるが、中途退学が多い今の現状を考えたときに、中途退学を減らす観点から、この4つの試案を見たときに、どこがポイントになると考えられるのかをお聞きしたい。
- ・峯岸さん、石川さんへの質問であるが、求められる学力は点数だけではなく、判断力か思考力、表現力なども重要だとの意見であるが、中学校でのキャリア教育などの指導をとおして得た、働くことについての考えや、中学校3年間やってきたことについての子どもたちの思いや願いをどのように高校に伝えるか、入試制度改善にどうつなげるのかについて、さらに御意見があればお聞きしたい。

○ 高橋 憲夫 氏

- ・高校の方では、目標を定めた段階で入学してほしいという思いがあると思う。中学校の方としても、中学校3年間で、高校3年間学校生活を楽しみながら過ごせる最低限の学力と、仲間をつくっていく人間関係づくり、そういう力をつけてあげたいと思い、頑張っている。
- ・進路決定までの段階の生徒を見たときに、1回目の予備調査の段階においては、学校における三者面談、または生徒との二者面談を行ったとしても、明確なものが子どもたちの方から出てくる可能性は少ないし、逆に子どもたちを追い込む可能性もある。一つ一つのステップを踏みながら最終決定に持っていくということを大事にしていかないと、中途退学は出てくると思う。
- ・進路決定をする段階においても、まだ、あいまいな子どもたちがいる。それを改善していくのが進路指導と考えるが、中学校としては、その点にこれからも時間をかけていく必要があると思う。
- ・子どもが推薦で合格したら、高校に進んだ段階において、自分の夢を絶対に実現するという確固たる目標を持った上で卒業させてやりたいと考えている。
- ・高校において、途中で退学しようと思っている状況がもし見られるとすれば、中学校に一報を入れてほしい。中学校と高校のきずなというのは、出口指導で終わるのではなく、将来を見据えたつながりを持つことだと思う。子どもたちの追跡をして、子どもたちの将来を見据えて、一緒にやっていきたい思いが、中学校の教員はあると思う。また、自分自身の確固たる信念を持って高校を受検する生徒が大半とはいないので、そこまでやっていく必要があると思う。

○ 峯岸 賢一 氏

- ・娘は、中学校のキャリア教育も受けたが、その時点では行きたい高校は見つからなかった。最終的には高校の体験入学に何校か行って、自分でこの高校に行きたいということを決めた。体験入学というのは、中学生が、高校に触れる非常にいい機会だと思う。そういう機会をもっと増やしてほしいと思う。

○ 石川 和彦氏

- ・私の娘も職場体験で、非常によい経験をしたと思うが、将来何になりたいという目標が決まるまでには至らなかった。これは時間がかかることだと思う。しかし、会社、企業で、非常に親切に受け入れていただいて、親としても、体験をした本人たちも非常に感謝している。感謝の気持ちを忘れないということの方が大事な気がする。

○ 齋藤 公子 委員

- ・中学校を卒業する子どもたちが、すべて明確な目標を決定しているわけではないという意見があった。自分自身が中学校にいた経験もあり、15歳の時に、自分の適性をしっかりと見きわめているかという点と決してそうではない。もう少しゆっくり考えたいと思うお子さんがいても当然であり、逆に一つの経験をとおして自分の将来をしっかりと見据えていれば、そのことはそれ自体すばらしいことである。また、いろんな子どもたちの存在がある。
- ・学校の特色について、子どもたちは、どういう表現で学校の特色を示してもらうことが、学校を選択するに当たって望んでいることなのか、あるいは中学校も子どもたちの進路指導をするに当たって、どういう表現があるとその学校を把握できるのかを、それぞれのお立場からお聞きしたい。
- ・特色化選抜に関して、志望動機を明確に子どもたちに書かせるという将来を考えさせる一つの機会を、子どもたちの成長過程の中で生かしていくために、学校の特色をどのような形で示すことが、高校側として学校を理解していただくことになるのかを、それぞれのお立場からお聞きしたい。

○ 高橋 憲夫 氏

- ・高校の情報として、子どもたちから一番最初に出てきたことは、人間関係であった。その人間関係というのは、例えば学校の中において上下の関係、横の関係の中で問題はないかどうか。その中で人間関係がよくないということが見えたときにはその学校を選択しないという状況が、はっきりと見られた。
- ・2点目は、自分が何を目標にしているかが決定している子どもの場合、自分が考えている進路達成状況がどうであるかであった。
- ・3点目については、学校の中での各教科の先生方の指導の在り方であった。特に、その教科の中でも自分の苦手な教科については、どういう指導の仕方があるのかであった。
- ・高校の学校説明会において、自分から質問するまでの生徒はいなかったようで、説明を聞くだけで終わっているようだ。

○ 加賀谷 亮 氏

- ・学校として今、発信している情報がいろいろあるが、一つは学校便りとして中学校に紙媒体でお便りを出している。また、ホームページを開設している。本校は県内でもアクセス数が多いホームページである。4月、5月の生徒の活動の様子を動画で掲載するなど、様々工夫して情報を発信している。
- ・勉強が難しい学校だといわれているが、それだけではなく、部活動とか生徒会活動も頑張っていることについても、是非発信していきたいと考えている。

○ 峯岸 賢一 氏

- ・専門コースがあればその専門コースの方に行く人もいると思うが、その専門コースの中でも、例えば料理の方に進みたいといったときに、まず基本を教えて、その後は和食を専門に教える、洋食を専門に教える、中華を専門に教える、お菓子を専門に教える、そのようなことも学校の特色の一つであると思う。
- ・ただし、子どもたちの考え方は、あの高校は制服がかわいいとか、まだそのレベルであり、それも特色の一つであると思う。

○ 馬場 義竜 氏

- ・ほかの学校と同じであれば、特色にならない。だから、いくら様々な媒体を使って発信しても、制服がかわいいだとか、そこは人間関係が余り悪くないだとか、学校の特色になるのだと思う。
- ・専門学科は特色が出しやすいが、一方、普通科の高校でもこういうカリキュラムがあって、こういうこ

とについて多くの時間をとりますとか、学べますとかが、それぞれの特色になると思う。

○ 石川 和彦氏

- ・娘は、第一志望の高校ではない高校に入った。体験入学で学校の様子、部活動の様子を見て第二志望の高校を選択した。各高校から高校便りをもたらってくるが、そういうものから感じ取れない部分がある。実際に体験してみて、何か肌で感じたものがあった選択したのだと思う。

○ 佐々木 悦子 教育委員

- ・子どもたちが将来どういう方向に進みたいかを考えさせること、中学校の現場の先生方の進路指導がとても大変だということを強く感じる事ができた。また、それを受けて教育している高校の現場の先生方も、大変な御苦労があるのだと感じた。
- ・体験入学をした結果、進路先を変更したという話を聞いて、これを現実の受検の場で生かしていくのは大変難しいこととは考えるが、いわゆるマッチングというか、子どもたちがいろんな高校に行って体験して、そしてまた逆に高校の先生方も何度か中学校の子どもたちと接する機会を持って将来を決めていくことが将来可能になるとよいと思った。
- ・高校に送り出した後、中途退学しそうな子どもたちが出たときに、中学校の先生に戻って、もう1回話し合えるような機会があると確かによいと思う。子どもたちを長い目で育てていけるような教育環境がつけるとよいと思った。
- ・具体的な入試のいろいろな方法については、もっと勉強させてもらい、答申を受けているいる考えていきたい。

○ 勅使瓦 正樹 教育委員

- ・それぞれの立場よりも、子どもたちのことを最優先に考えたときに、高校入試の在り方がどうあるべきなのかを、皆さんの意見を聞きながら決めていってほしい。それぞれの立場が表に出ると、子どもたちにとって一番よい入試の在り方なのかがおろそかになってしまうと思う。
- ・試案には特色化選抜という制度が明確に示されている。専門学科については、高校の特色がある程度明確に見える。しかし、普通科の各高校の特色は、一般県民、あるいは地域の方々からするとなかなか見えない実態がある。普通科の各高校の特色がはっきりと見えてこないことについて、課題があると思う。

〈傍聴者からの意見要旨〉

- ・推薦制度はよくないと思う。推薦入試で不合格の生徒が、一般入試でまた何人か不合格となる。2回不合格となる経験を生徒がする。百害あって一利なしと考えるので、推薦制度の廃止には賛成である。
- ・推薦制度を導入して、3回の受検機会が定着したので、多くの保護者や生徒は3回の受検機会を希望している。しかし、同じような評価の仕方、選抜の方法をするのであれば、推薦制度を導入する前に戻し、一般入試と第二次募集というのが、シンプルで現場に合っていると思う。
- ・2回の試験の方がよいと思う。受検の機会が増えた方がよいという希望よりは、やはり入学したいんだと思う。どの子どもも入学したい学校で高校生として生活を送りたい。将来の進路に関して、まだ見えない部分があるかもしれないが、高校に行って本気で考えたい子どもたちもたくさんいると思う。
- ・例えば、3回の受検回数分、定員が増えていくのならチャンスが増えるという考え方で納得ができるが、合格のチャンスが増えるのではなく、不合格になる機会が多くなる制度だと思う。それは子どもたちを傷つけることにほかならないと思うので、是非2回で、自分で選んだ高校で一度落とされたことのある高校だとかという気持ちで入学することがないようにしてほしい。
- ・意見聴取会で何が話し合われているのか、多くの方が理解することが大事である。審議会の方々が、意見発表者の方の意見を聞いて、質疑応答をすることも大事なことであるが、何よりも県民に今入試制度が変えられようとしていることを知らせる大事な機会が意見聴取会だと思う。是非、もう一度、仙台で、小中学校に案内をするなど、多くの保護者が参加する意見聴取会をしてほしい。
- ・普通科の高校の特色が見えないという教育委員の話があったが、普通科の「普通」という言葉と特色化の「特色」という言葉は、全く反対の意味なので、当然特色は出せないと考える。
- ・齋藤委員の観点というのは非常に大切なのでないのかと思う。中学卒業のときに、目標がはっきりしない子どもは多くいる。その中で、高校が明確に特色を出して生徒を募集するといった場合は、はっきりしない子どもは、全部の高校を見ると、当てはまるようで当てはまらない。でも、高校を選ばなければならない。自分をその型にはめるしかなくなる。非常に窮屈な思いをして高校を選択することになる。
- ・秋田県のある高校では、求める生徒像が大学進学を希望する生徒としているが、自分の進む方向が変わって、大学進学をあきらめるという場合などは、その子どもは、自分はこの高校にいるべきではなく中退するしかないと考える。普通科というのは、様々な志望を持っている子どもが集まって、途中で志望が変わっても、自己実現をするための勉強ができる高校であると思う。
- ・将来構想についても今議論されているが、高校をどのようにしていくかという議論の中の一つが入試制度改革だと思う。今回の議論は全く順番を逆にしている。県教委の方向性がわからない。
- ・馬場さんの現状のとらえ方と教育の在り方、学校教育の中での労働の意味や生き方について学ぶ機会の保障という話に、非常に共感した。高校入試の在り方だけにとどまらない教育全体に課せられた課題として捉えていきたいと思う。
- ・入試制度改善にとどまらず、子どもたちの将来、社会の在り方について、担っていく子どもたちをどうするかということが大きな課題である。
- ・全県一学区化に付随する問題が当然出てくると思う。全県一学区での子どもたちの姿をさらに分析した上で入試制度の在り方を、継続的に、県民の意見を広く聞きながら進めてほしい。

(5) 大河原会場

【日 時】平成21年5月17日(日) 13:30~15:30

【会 場】宮城県大河原合同庁舎別館第二会議室(柴田郡大河原町字南129番1号)

【出席者】意見発表者

柴田町立船岡中学校長	伊藤 誠 氏
宮城県角田高等学校教諭	大坪 泰久 氏
大河原町立大河原中学校PTA会長	佐藤 圭一 氏
宮城県社会教育協会大河原支部長	高橋 久 氏
白石市子ども会育成会連合会長	徳力 弘正 氏
入学者選抜審議会委員	
委員長 大桃 敏行	
委員 小平 英俊	委員 庄司 恒一
教育委員	
委員長 大村 虔一	委員 勅使瓦 正樹
教育委員会事務局	
教育次長 千葉 裕一	教育企画室長 安住 順一
義務教育課長 竹田 幸正	高校教育課長 高橋 仁
高校教育課課長補佐 佐藤 靖彦	

<意見発表要旨>

○ 伊藤 誠 氏

- ・進路指導に直接携わっている学校現場から意見を述べる。
- ・現在施行されている3回の受検機会と総合的な選抜に当たっては、受検生の進路選択幅の拡大、多様な能力の評価、高校に対する興味・関心、将来に対する適性や希望など、いろいろな面の要素を加味されよいことだ。これは中学校現場の声、高校現場の声、さらに生徒や保護者、県民の声を宮城県教育委員会がいろいろな角度から聞き入れて改善をしてきた結果ではないかと思っている。
- ・現場での一番の問題点は推薦制度である。導入当初は、学力検査だけでは能力を測りきれない生徒を推薦合格させる基準が県にもあり、中学校現場でも選考しやすかった。
- ・すべての学科における推薦入試の導入と人数制限の撤廃により、現在ではすべての生徒を推薦してもよいし、極端にいうとどの子も推薦しなくてもよいというかなり自由な裁量が中学校に与えられている状態になっている。よい面もあるが、現場としては混乱している面もある。
- ・県の5つの推薦条件を満たし、さらに中学校長の推薦が必要であるが、校内選考の基準としては、志望動機、理由、適性、興味・関心、高校生活への意欲を重視している。
- ・専門学科に進みたい生徒は、小さいときからその分野に興味・関心を持ち、高校の体験入学等をおして志望動機が明白である。普通科の場合は、特色ある教育内容を中学校側、保護者や生徒にも説明をいただいているが、専門学科に比べると弱い。概して普通科を志望する生徒たちの志望の動機は共通して大学進学となってしまう。その先の将来の目標は中学校の段階では明確になっていない。明確でないが故に普通科を選ぶ。そうすると、推薦制度の趣旨からいって、普通科を希望した生徒を推薦することはなかなか難しい。推薦書においても、人物評価は書けるが、普通科志望の生徒の志望の動機を文章表現していくのは難しい。
- ・普通科の推薦制度を無制限に行うことが果たしてよいことなのか疑問である。推薦されると合否結果が出るまで安心をしてしまう。結果が悪ければ大きな不安に変わることがある。
- ・推薦入試で合格した場合の高校入学までの学習状況を紹介する。大体どの中学校でも入試事務の関係上、11月には推薦希望の有無を調査する。総合的な判断をして、本人、保護者に推薦することを通知する

のが大体12月の下旬。その時点で、今まで5教科の勉強をずっと頑張ってきた生徒の気が抜けてしまう。1月30日前後の面接を終えて、2月に結果が出ると、学習に取り組んでいた11月末までの集中力がさらに薄れる。つまり、12月から3月いっぱいまでの約4ヶ月間、学習に身が入らない状態で高校に入学していくことが多い。

- ・推薦に関しては中学校によっては、校内選考を厳しくしてきている学校が多くなっている。それは学力低下の問題とも関係していると思う。中学校で推薦した生徒が5つの条件を本当に満たしているかをきちんと判断して選考に当たっている学校が、少しずつ増えてきていると思う。その結果、中学校の推薦基準がまちまちになり、推薦をある程度出す学校と、生徒数が多いにもかかわらずずっと少ない数に抑えている学校とが出てくるのが考えられる。
- ・3回の受検機会はあるが、まず校内選考でその受検の機会が奪われる生徒が結構多くなる。第二次募集は、定員に満たない学校しかやらないので、結果としては、大半の子どもにとって制度は3回だが、実際は1回の受検機会しかない。
- ・総合審査では調査書も重要な資料となるので、中学校では調査書作成委員会をつくり、十分に各生徒に関する情報交換を行いながら記載された内容を点検して高校側に送る。ただし、中学校では、それがどのように利用されているか、どのように数値化されているかわからない。学力検査と同等の審査資料ということは、すべての項目が数値化されていることなのかと考えている。しかし、行動の記録など数値化できない項目もあるのでないかと考えている。
- ・私個人としては、試案のD案をベースにB案を加味して改善するという考えである。D案ではどの生徒も学力検査を受けるために一生懸命勉強に取り組むし、どの生徒も必ず2度の受検機会がある。ただし、前期選抜の募集が定員の50～90%では後期選抜は困るので、最大で50%に抑えていただければと思う。
- ・40年間見てきて、推薦入試のよさもあると思う。特に専門学科の子どもたちは、技能面ですぐれていることがたくさんある。そのような生徒にとっては自分をアピールする機会があった方がよいと思う。よって、B案の専門学科の推薦入試を前期選抜の中に入れて、仮に50%だったら推薦を30%程度いれるのはどうかと考える。
- ・定員に満たない場合に実施する第二次募集は、生徒や保護者が望んでいるので、あった方がよい。

○ 大坪 泰久 氏

- ・高校教師の一意見として、考えを述べたい。
- ・私が高校入試を考える上で一番感じていることは、中学生には頑張って勉強して高校に入学してほしいということである。
- ・推薦入試合格者は、目的意識が明確で意欲のある生徒ばかりであるが、一般入試で受検しても合格するのでないかと思う。推薦入試で合格してきた生徒が一般入試で受検していたなら、もっと頑張って勉強し、もう少し学力の高い状態で高校の学習をスタートできたのではないかと思う。
- ・複数回の受検機会を設定する考え方に賛成である。実施時期については、できるだけ遅い時期の方が望ましいと思う。2月の初旬と3月の下旬の2回が基本で、第二次募集を含めて3回という考え方でよいのではないかと思う。
- ・推薦入試に関しては、各高校の出願要件をできるだけ詳しく明示した上で、これを満たせば受検生の希望で出願できるようにする、特色化選抜にかえるという方法でよいと思う。
- ・生徒自身に書かせる志願理由書の指導は中学校の先生方が大変だと思うが、推薦入試の作文の指導等の話を伺うと、何とかなるのではないかと感じる。募集定員に対する割合の上限を下げ、選抜方法に学力検査を加えることで、学力面の弊害を少なくすることができるのではないかと思う。
- ・一般入試については、特色ある学校づくりの観点から学校裁量幅の拡大を図る方向性に賛成である。現在は調査書点と学力検査点の比重を同等に見ているが、この比重について、学校裁量を認めると同時に、加算方式のような単純化した方法も検討した方がよいと考える。さらに調査書の中の教科別の比重についても、例えば学校・学科によっては英語の評点を2倍にする等の学校裁量を認めてもよいのではないかと考えている。
- ・調査書の、観点別学習状況、選択教科の評定、総合的な学習の時間については、簡略化してもよい。

- ・私の個人的な考えに一番近いのは、A案である。C案のように3教科の学力検査を必修とした場合には、各学校が特色化を図る入試が実施しにくい。D案のように2月中旬に50%以上が決まるという点では、大学入試の前期・後期選抜と同じようになり、高校入試としては大変である。
- ・受検生の希望により出願できる前期選抜の募集定員に対する割合の上限を下げることで、選抜方法に学力検査を加えることができることは、受検機会と学力の保証にとっては大きい。その上で、各高校の出願要件については、例えば普通科でも、文武両道の観点から中体連で県ベスト8以上の成績をおさめた者とか、中学校の欠席日数が10日以内の者とか、5教科の評定平均が4以上の者とか、具体的な基準も示しても構わないことにしてもらえばよいと思う。
- ・選抜方法について、調査書、面接、作文、実技、学力検査等の実施したものを点数化する。例えば、調査書は135点、面接45点、学力3教科で120点、合計300点。この300点をもとに、総合的に判断して選抜する方法もよいと思う。
- ・前期選抜で学力検査を実施する場合、3教科の問題については基本的に県の教育委員会の方で作成、準備するとした上で、学校独自問題も可能という方法がよい。各高校の特色ある学校づくりを考えた場合には、学校独自問題が望ましいと考える。問題については、前期選抜の日程が面接を実施しても1日で終わることができるように、例えば1教科40分程度の問題でも構わないと思う。
- ・後期選抜では調査書点と学力検査点の比重や調査書の教科別の比重について、学校裁量を認めるとともに、選抜については、加算方式のような単純化した方法がよい。
- ・調査書点と学力検査点の比重が学校裁量となる場合、できるだけ受検生に選抜方法が理解しやすい方法、例えば、総合得点の上位80%を第1次選考として、第1次選考で選抜された以外の40%以内の人員を対象にして第2次選考を行うなど、これまで培ってきた方法を加味するとか、いろいろな方法が考えられる。
- ・高校入試は多様な能力や適性、意欲や関心を持つ子どもたちが、自分に合った高校を主体的に選択できるという観点で考えることが大事である。

○ 佐藤 圭一 氏

- ・私自身、親の立場として疑問に思った点があり、もしこの場でお答えいただけるのであればお願いしたい。A案からD案まで4つの試案があるが、この4つの試案で問題提起されているものが解決し得るものであるのか、教育委員会で考えている最良の案はどれなのか、お聞きしたい。

○ 高橋 仁 高校教育課長

- ・この4つの試案については、どれが一番よいということでは示しているものではない。中間まとめに示された課題が、この4つの試案のどれかですべてを解決できるということではない。今後の議論の材料として具体的に話をさせていただきやすいという観点から4つの案が示されたものである。

○ 佐藤 圭一 氏

- ・4つの案を実施した場合のリスク検証、問題の検証はされているのかどうか。この表を見ただけではわかりづらい。「これをすればこういう問題がありますよ。」という点と、この4つの試案をつくるに当たって、中学校とか高校の先生の意見はここに入っているのかどうか、伺いたい。

○ 高橋 仁 高校教育課長

- ・4つの試案には、それぞれメリット・デメリットがあり、これまで議論を重ねてきている。この改善試案の中で、具体的にメリット・デメリットを明確に書いていくと、その観点到議論が集中するので、あえて具体的なものは記載をしなかった。審議会、小委員会、どちらにも中学校の先生、高校の先生に委員として入っていただいて、議論を進めてきている。

○ 大桃 敏行 委員長

- ・審議会では、中学校、高校を対象にアンケート調査を実施している。現在の制度の問題点、課題点等は、その調査からも出てきている。特に、中学校の先生方から、推薦制度に関して多くの課題等が指摘されている。

○ 佐藤 圭一 氏

- ・この4つの試案については、どれがよいとも、どれが悪いともいない。
- ・私たち親の立場、一般県民の立場からすれば、改善案は一つに絞った状態で示してもらい、問題点を例示し、それへの対処を県民に提示してもらわなければ、それについて一般の親、県民は何もいないと思う。この後、タウンミーティングやパブリックコメント等も行うと思うが一般県民や親の話、意見を聞くというのは、一つの案に固まってからでも遅くはない。改善すべき点は改善し、理解を得る部分は理解を得るように努力をするのが本筋ではないかと思う。
- ・次の新しい入試制度を、早ければ平成24年の春から始めると急ぐのではなく、十分に議論をして、子どもたちの一生を決める大変大切な入試制度を検討してもらいたい。
- ・推薦入試において中学校の校長先生にある意味「お墨つき」をもらって高校を受検して、それに対して合否がつくというのは疑問である。
- ・3回の受検機会は選ばれた生徒たちにとっては最大3回受けられることであるが、一般の生徒にとっては1回だけの一発勝負にはかわりはないと思う。
- ・調査書に関して、5段階評定の公平性は、そもそも学校で別々の試験を実施しているのであるから議論するのは解せない。もし、公平性を求めるのであれば、大学のセンター試験のような全県一斉のテストを行い、それで点数をつけないと公平性というのは保たれないのではないか。
- ・アンケート調査で、推薦入試のメリット・デメリットというものを各中学校・高校にアンケート調査をしているようだが、何がデメリットなのかつかみきれなかった。推薦基準が明瞭でないというのが一番なのかと思った。結局、この入試制度が悪いのか、それとも入試制度運用上の問題があるのか。制度ではなくて、その制度運用上の欠点があり、それさえクリアできれば今のままでもいいという結論が出る場合もあるかと思うので、その辺をもう少し議論してもらいたい。
- ・デメリットは、高校の選抜基準が抽象的であること、中学校の校内選考の問題点、④評価に枠があることに問題があるということか。
- ・前期選抜での志願理由は、仙台市内では高校がたくさんあり、生徒も考えて選ぶこともあるだろうが、郡部においては選択肢がそれほどない。私も中学生のときに、大学進学をするのであれば、白石高校しかなかった。それに対して志願理由書の記載を求めるといのはなかなか難しいのではないかと思う。
- ・私の子どもは今3年生なので、全県一学区での入試となり、高校選択の幅が広がると思う。しかし、実際問題として、通学時間や交通費の負担を考えれば、地元の高校を志向することが主流だと思う。大河原や柴田のような、東北本線沿いの子どもたちは、まだ交通の便には恵まれているが、そのほかの周辺の市町村では高校選択の幅というのは狭くなっていると思う。その子どもたちが、志願理由書を書くのは難しい。また、指導する先生方も大変だと思う。再考してもらいたい。
- ・前期選抜において、現在の推薦枠よりも狭まり、加えて希望者が全員受検となると、競争倍率が高くなり、逆に受検機会を狭めてしまう危険性がある。競争倍率が上がれば、送り出す中学校の先生方は、ほかの子どもたちとの差別化を図る調査書をどう書くか、頭を悩ませるようなこととなる。これでは、本来の仕事ができなくなり、本末転倒な話が起これるのではないか。

○ 高橋 仁 高校教育課長

- ・現在、この4つの試案をもとに広く御意見を頂いている。これらを参考に、7月の審議会で答申素案を御議論いただき、公表できるように事務局としては準備したい。その後、新たな方向性について、審議会から公表いただいた答申素案についてのパブリックコメントを1ヶ月程度実施し、様々な御意見を頂き、それを踏まえてさらに審議会で検討いただいて、最終答申を12月をめどにまとめていただく予定である。その後3月までに、今度は教育委員会として、その最終答申を踏まえてどういった新しいシステムがよいのか、教育委員会の中で議論し、できれば3月までにまとめていきたい。ただし、この3月までという部分についても様々な議論があるので、予定として考えてほしい。さらに、先ほど担当からも説明したが、この入試を実施するのは、最も早くても平成24年の春の入試からである。これも決まったものではなくて、最も早いスケジュールで考えればということであり、できるだけ時間をかけて周知をする必要があることになれば、平成25年度入試からということもある。一方において、現行の推薦入試をなくしてほしいという声は極めて大きくなっており、事務局とすれば、改善できるものは早く

改善したいという気持ちもある。ただし、推薦入試を廃止することだけで済むのではなく、これに伴ういろいろな問題点が出てくることも考えられるので、審議会に全体的な議論をお願いしている。

○ 高橋 久氏

- ・改善に向けての基本的な考え方、改善の方向性は、全く妥当なものだと思う。
- ・具体的にこれらを実現するために何をやるかということの話が大事である。
- ・受検機会を複数回確保することが、受検生及び親にとって納得のできる進路に少しでも近づく方法であると考えられる。
- ・中学校長による推薦を全部撤廃することに、個人としても賛成である。
- ・受検機会は3回あるというものの、校長推薦がなければ受検できないのであれば、これで1回断たれたのと同じである。3回目の第二次募集は、欠員があった場合のみなので、具体的には1回という。これが複数回確保というのだろうか。
- ・試案のA案、B案、C案は中学校長による推薦が必要なく、高校側の基準に合致する生徒の出願が可能な仕組みであるが、前期選抜を受検する子どもたちの数は大幅に増えることが予想され、とりわけ普通科について定員を前期選抜で10～20%にとどめると高倍率になることが考えられる。募集定員に対する割合は40～50%ぐらいまでは確保してやらないと、意味のないものになってくると思う。また、学力検査を行うことは、確かな学力を身に付けさせる意味では、非常に大事だと思う。
- ・A案、B案、C案の試案の実施時期は2月初旬実施となっているが、なるべく後ろにずらせるのであれば後ろになるほどよいと考えている。C案の前期選抜で合格者の数を多くすること、実施時期を遅くすることにより、限りなくD案に近くなっていく。
- ・私個人としては、D案に賛成である。ただし、第二次募集は必要で、おそらく後期選抜での合格発表時に欠員は何名というのはわかると思うので実施可能でないかと思う。
- ・高校の先生方が前期選抜の2月中旬、後期選抜の3月中旬という形で事務が追いついていけるのか懸念されるが、もしもそのことがクリアできれば、こういう方向がいい。子どもたちは最初、第一希望に挑戦する。そこでダメなときにもう一度、自分を冷静に考える時間、そして挑戦するという形のものがとれるのではないかと考える。
- ・前期選抜における各高校の裁量幅や合格の基準や、自分の高校ではこういうことを重視するという事などは、かなり高校に幅を持たせてよいのではないかと思う。
- ・評価について及び点数化についても高校にある程度任せていくべきではないのか。そのことが、高校側で、より特色のある学校づくりにつながるのではないかと思う。

○ 徳力 弘正氏

- ・前期選抜、後期選抜、第二次募集、この3つの受検機会は適当だと思う。
- ・D案では4月入学後の全生徒の自己意識が大きく二分されてしまい、後期選抜で入学した10%ないし50%の集団と、前期選抜で入学した50%ないし90%の集団とに全校生徒が二層分離しやすくなるのではないかと。むしろ、前期で選抜される10%～20%、専門学科が20～40%、そういう割合の方が生徒集団の構成としては弊害が少ないと思う。
- ・前期選抜で学力検査を入れるのであれば、募集割合の上限が10%から20%という数字は余りにも少ないと思う。受検者が集中するという話からも上限を上げた方がよい。
- ・後期選抜の対象は、「前期選抜に合格していない者」を「前期選抜に合格した者を除く受検者」とか、限定して表現した方がよいと思う。
- ・志願理由書の提出は、本人の意思をきちんと聞くために、必要だと思う。目的を持って入学する生徒が集まることが、学力の向上にもつながる。
- ・後期選抜の志望動機の明確化は前もって作文を出すよりも、受検会場で作文を書いてもらった方がよいと思う。志望動機を書かせるためには、その前提として、各高校の特色づくりと、社会的役割の分化等がまず必要だと思う。
- ・私の考えは、4案の中ではB案に近い。前期選抜の定員を少し増やし、社会奉仕、ボランティア活動、文化活動、体育活動等いろいろ中学校で頑張った生徒を評価したいと考える。学校教育は人間を育てる

という観点から単に学力だけが向上したらよいというわけではなく、社会奉仕の活動など、対人的な活動を特に重く取り上げてよいと思う。

- ・今の教育において、ともすると自分一人が合格すればよいという考えはないだろうか。人との協調性、助け合いという気持ちがだんだん薄れている社会になってはいないだろうか。人間同士のつながりというのが非常に希薄になってきている。人間を育てる上において、そういう気持ちを持っている者は伸ばしてやることも必要だと考える。
- ・頭脳明晰の人たちが身につけた学力を悪い方に利用して他人に迷惑をかけることもありうる。学校教育というのは、人間を育てていく大事な使命を持っている。

<質疑応答要旨>

○ 小平 英俊 委員

- ・志望動機について意見発表者の方々からだいぶ取り上げられていた。単に受検ということで高校に入るだけではなくて、キャリア教育を踏まえて、将来的な自分の方向性を考える機会にしてはどうかという話もあった。もう一点は、中学校から高校に入るときの円滑な教育の接続である。このことに関して、伊藤先生と大坪先生に質問であるが、中学校で指導する観点は何か、また、高校は生徒を受け入れるとき、どの程度重要視して考えていくのか、教えていただきたい。

○ 伊藤 誠 氏

- ・中学校の進路指導で心がけている点は、子どもたちが主体的に自己の将来を考えていくことであり、長い人生の中の一つの選択肢として高校進学というものをとらえている。生き方の教育をあらゆる教科、その他の領域でも様々な機会をとおして指導をしている。特に体験的な学習をとおして自己を理解させ、自己の進路についての関心を高めている。
- ・高校進学については、情報を提供すると同時に、実際に高校の学校説明会や体験入学に参加させて、自分の目と心で感じさせていく段階を踏んで、何度か二者面談、あるいは三者面談という場をとおして確認している。当然、面談前に志望校、志望動機を記入させ、さらに保護者の考えも記入してもらうなどしている。
- ・専門学科を希望する生徒は志望動機、理由、あるいは将来の夢が、中学校3年生ぐらいである程度明確になってきている。動機が明確に絞りきれない生徒が、現段階ではとりあえず普通科の高校に進学し、さらに学習をしながら自分の将来をもっと見つめ直していくケースも多い。
- ・志望動機を記入して高校受検というのは、可能な生徒となかなか難しい生徒がいると思う。

○ 大坪 泰久 氏

- ・推薦入試、第二次募集で重要視している。前期選抜では、志願理由書で志望の動機の明確化を図ってもよいと思う。後期選抜の場合は考えさせることは大事だと思うが、選抜資料として使うのはどうか。志願理由書というよりは、全員に書かせるのであれば、自己PRカードのような、例えば中学校時代にどんなことを頑張ってきたか、高校ではどんなことをやりたいか、将来の夢は何かを書かせることで確認ができるのではないかと思う。高校側では、3月の予備登校の段階でそのようなことをやっているの、入試の段階でそれがどのぐらい必要なのか、正直、迷うところである。

○ 庄司 恒一 委員

- ・今日の話の中で、学校の裁量幅の拡大、高校側での基準等も含めて裁量の幅を拡大するという意見もあった。伊藤先生に質問であるが、高校ごとの基準とか、前期選抜・後期選抜の募集定員に対する割合とか、調査書点と学力検査点の比重のかけ方が多様化した場合、中学校側としては今後生徒の進路指導をしていく上で大変にならないか、また、調査書の様式も含めて利用等について、さらに御意見を頂るのであればお聞かせいただきたい。

○ 伊藤 誠 氏

- ・ 極端な裁量幅が高校間にあった場合は、確かに困ると思う。しかし、高校側で求めている生徒は、学力が50%、その他の面が50%、そういう高校ばかりではないと思う。高校の特色ある学校づくりを進めていく上で求める生徒像、高校で育てたい生徒について、裁量幅が高校側で必要になるのではないかと考えている。それをしっかり中学校側にわかるように示してもらえば、中学校側の進路指導もしやすくなる。
- ・ 調査書については、具体的にどのように点数化されているか私はわからない。私たちが一生懸命書くということは、文章表現したことも、丸をつける部分も、あるいはA評定をつける部分も、全部点数化されているのだろうと考えている。しかし、各中学校現場を見た場合に、例えば総合的な学習の時間の記録、あるいは選択教科のA評定などももし点数化されて差別化されているとしたら、担任の表現力次第になってしまうのではないかと心配する面もある。
- ・ 観点別学習状況はA評定のみとあるが、中学校側ではA、B、Cの3段階で指導要録に記載している。Aだけを記入するということは、Aだけが点数化されており、高校ではBとCの生徒を同列にとらえ、点数化していないものと考えている。調査書も大事な選抜資料なので、公平性、透明性を考えるならば、高校側から活用の仕方等を示してもらった上で、中学校側も、しっかりと子どもを評価して、記載していきたいと思う。

＜傍聴者からの意見要旨＞

- ・D案の前期選抜・後期選抜の仕組みは青森県に相当する。青森県の場合、中学校の卒業時期が前倒しになった。
- ・特色化選抜は千葉県で行っている。志願理由書は普通科だと書きにくいものでないかと思う。都市部では学校の先生も指導してくれないので、どうしても塾が下請けをすることになってしまう状況がある。
- ・中間まとめについて、学校に対するアンケートで、「3教科程度」と表現しているが、試案では「3教科以内」となっている。私個人としては5教科も想定してもよいのではないかと思う。特に、白高に統合する看護科、仙台三高、宮城一高の理数科では理科を出してみたいと考えられると思うし、泉高校の英語科は英・国・社で出してみたい考えもあると思う。二高の場合だと、センター試験が5教科あるので、5教科を課してみたいという考えもあるのではないかと思う。3教科以内で縛ることに疑問を感じる。
- ・特色化選抜は現在廃止傾向にあり、千葉県も間もなく廃止予定である。C案は埼玉県の前期選抜・後期選抜の仕組みにやや似ている。その埼玉県では今年から入試制度を変更する。結局また見直しをすることになるのでないか。そうすると、また受検生に混乱が生じてしまうのではないかと思う。
- ・受検する生徒のことは余り考えていないのではないか。先ほどPTA会長さんから話があったとおり、推薦制度にしても、中学校の立場からすれば急にできてきた制度であり、教員や親は意見をいたわけでもなく、突然ふってわいたような制度だと思う。推薦制度は、高校側の都合で青田買いみたいな形でよい生徒をとりたいたいということで設けられた部分があると思う。
- ・高校でよい生徒をとりたいたいという「よい生徒」は、括弧つきのよい生徒だと思う。大学入試でよい成績をとれる生徒や、部活動において県大会で8位以内とか、大学進学やスポーツ大会でよい成績を上げられる意味の「よい生徒」でないかと思う。そういうことで公教育が成り立ってよいものだろうか。
- ・公教育の「特色化」とは何か。どの生徒にとってもわかりやすくよい授業が受けられ、十分な施設でスポーツができるというような状態に、すべての高校がなって、公教育だと思う。
- ・資料2ページで「学力検査問題の質と量、英語・学校選択問題の有効性に疑問」とあるが、一部の進学校の中で「よい生徒」を選抜するために選択問題を取り入れたように思える。
- ・子どもの立場に立って改革をしてほしい。
- ・5回の意見聴取会で様々な意見が出てきたと思うが、結局意見がばらばらだった。この状態で、どういう答申を12月に出すのか疑問である。学区撤廃のときも、初めに結論ありきであった。教育委員会事務局の学区撤廃という方針に、最終的には教育委員の皆さんもそれに同調された。今回は、佐藤さんもいわれたように12月結論などといわないで、慎重に審議を続けていただきたいと思う。
- ・大学入試とは違うので、ややこしい制度をつくる必要はない。シンプルで公平性が保たれるのは、現行から普通科推薦を廃止し推薦は専門学科のみにすること、これが一番ベターな仕組みだと思う。全県一学区になり、加えて特色化選抜が入ってくるとややこし過ぎて、子どもたちがかなり犠牲になると思う。
- ・佐藤さんの質問に対して、事務局で「審議会等の中・高の先生が入っています」と回答しているが、校長先生方は入っているが、子どもの泣き笑いを肌で感じ、目の当たりにしている中学校の教師が、原案作成にかかわっていたのだろうか、疑問である。
- ・高校の先生から、推薦で合格する生徒の学力がその後伸び悩むという話があったが、それは5教科の学力に偏った考え方である。推薦で頑張った生徒は3年間、音楽、美術、体育、技術家庭、情操面も含めて頑張ってきた生徒である。それも学力、生きる力ではないだろうか。学力論はもう少し議論を深める必要があると思う。
- ・推薦入試廃止が特色化選抜になることに疑問を感じる。ほかの県で行っているからではないか。和歌山県では、特色化選抜を入れたら、特定の人気の学校、進学校などに集中して、大量の生徒が不合格になったこともあり、わずか2年で特色化選抜を廃止している。
- ・この間まで私も3学年を担当していたが、私立高校、公立高校に落ちて、もう一度同じ公立高校を受けたが、9名ぐらいの第二次募集の枠に、6名ぐらいしか応募していなかったのに、また不合格とされた。勉強はちょっと苦手だが、全然できなくはない。遅れているだけで、とてもよい生徒である。そういう生徒にも高校教育をどのように保証するのかという観点に立てば、より本質的なところで考え、入試制度の改善を図っていただきたいと思う。